
時と宇宙（そら）を超えて～分割版～

琅來

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時と宇宙^{そら}を超えて〜分割版〜

【Nコード】

N7986X

【作者名】

琅來

【あらすじ】

こちらは分割版となります。

長編版 ↓ <http://ncode.syosetu.com/n0697p/>

身分が物を言う世界——そこは、今から千年後の、宇宙進出をも果たした、遠い遠い未来だった。そこには、二人の少女がいた。彼女達は身分が違いながらも、仲のよい親友だった。けれど、中学一年生の夏休みから、二人は運命の渦に翻弄されることになる。そうし

て知った、衝撃の事実とは――。

序章「総ての始まり」(前書き)

この話は基本的に友情物ですが、話の都合上恋愛も入ってきます。
また、途中で近親相姦も入ってくるので、苦手な方はご注意下さい。

序章「総ての始まり」

「嗚呼。この子は……この子はあの時に、産まれて来てしまったのですわね。せめて……せめて、もう少し遅ければ……」

「そのことは、言うな。今は、産まれたてのこの子供に、名を付けなければな」

「それは、考えがあります」

「どのような名だ？」

「はい。それは、今この国にはない、富や名声を陰謀などによって手に入れるのではなく、優しい行いによって心を富ませること、樹木を視てその神秘を感じる美しい心、そして、その時に実った果実を、単なる食糧として感謝する気持ちすら持たないのではなく、ここまで育ってきたその生命力と大地の恵みに感謝する心を願って、——と名付けましょう。この子が——になった時の繁栄を願い」

「ああ。それはいい。美しい名だ」

「ところで……」

そう言つと、美しいその女性は、一息置いてから、隣の男性に話しかけた。

「この子は、やはり、あちらへ……？」

「その時は、お前の名をつけよう……きつと」

「あの……この子に、弟か妹が産まれたら……そして、信頼でき、決して裏切らないような子供がいた時は、その時にはこの子が——と言つて、いいですわよね？　いくらあんな人でも、まだそのような酷いことをやろうとは思わないでしょうから」

「ああ。我らはいつまでもいられるとは、限らんのだからな……」

この二人の間に、なんとも淋しそうな空気が流れた……。

「まあ、なんて可愛い子なんでしょう。ぴったりの名前は何かしら？」

「そうだなあ。そうだ。古い言葉で、『鶴は千年 亀は万年』と言うではないか。だから、鶴はどうだ？」

「そんな名前は嫌よ。なんて言っただって、この——に相應しい名でない、絶対にからかわれるはずだわ。それに、古風すぎるわよ。絶対に、断固として拒否します」

「しかし、縁起がいいと言うと……」

「じゃあ、この——を取って、私が好きな音で響きのいい、『——』という音をつけましょう。そして、この『——』の漢字は、このように」

女性はそう言うと、手元にあつたパネルに一つの漢字を書いた。

「そう、そしてこの二つをくっ付けて、——にしましょう！ 貴方、反対、しないでしょね？」

「も、勿論だ！ 反対する訳がない！ ……それに、響きのいい名だしな」

「ええ。本当に……本当に、可愛い子。大きくなった時、どんな子でもいいわ。この子に合う友達が、沢山できるといいわね……」

「ああ……そうだな……」

先程の二人とは実に対称的に、何とも暖かく、優しい想いが満ち溢れた……。

第一章「日記帳」― 1

ここは、今からおよそ千と数百年後の、西暦三二四八年、全宇宙共通暦一三二一年の世界。

西暦二七〇〇年頃、地球は他の遠く離れた星から発見されたことを告げられ、しかも文明がこちらの方が大分遅れていることに気付かされ、大混乱に陥った。

だが、ここではもうそんなことは遠く昔の過去の出来事となり、地球は地球連邦となり、日本国はただの日本州となつて、みんなが全宇宙共通語を話す時代となつた。

ここはそんな日本州の、とある街にある公園だ。

季節は夏真っ盛りで、夏休みである。

「由梨亜^{ゆりあ}！ お待たせっ！」

「あら、遅かつたじゃないの、千紗^{ちさ}。呼び出したのはそつちのくせに」

声を掛けられた少女――由梨亜は、背中の中程まで届く、柔らかく波打った茶色の髪を一つにまとめている、緑がかった黒の瞳の美少女で、声を掛けた少女――千紗は、肩甲骨辺りまでの、長くもなく短くもない長さで、墨を流したかのような、柔らかく光る真っ直ぐな黒髪を一つにまとめ、瞳の色は髪よりは茶色い色をしている。

それだけならいいのだが、今の地球連邦の常識で考えると、この光景は可笑しく見える。

何故なら、由梨亜はいかにもお嬢様に見えるのに対し、千紗は普通の少女なのだ。

もしもここに常識のある、普通の人がいたら、首を捻ったはずである。

何故ならこの地球連邦は身分社会で、大きな会社を経営し、しかも慈善団体などに寄付するお金を惜しまない、何十代も続く家を貴族と呼び、いくら稼いでも、寄付するお金を惜しむ家や、まだ成つ

て間もない成り上りは富豪と呼ばれ、それ以外の人は庶民と呼ばれる。

また、商売をしていても、老舗と呼ばれるような昔から経営しているお店でも、支店がなかったり、少なかったり、手を付けている仕事の幅が狭かったりすると、いくらお金を稼いでも、寄付しても、ぎりぎり富豪には認められるかもしれないが、貴族として認められない。

そして、この由梨亜は正真正銘大貴族のお嬢様で、千紗は正真正銘の、親戚のどこを捜しても富豪や貴族がない、立派と言ってもいいほど立派な庶民なのだ。

しかし、この二人は敬語を使わず、しかも相手の名前すら呼び捨てで普通に通している。

なので、珍しくはあるが、二人は身分を越えて友達になったと考えるのが妥当である。

「あのね、由梨亜。さっき先輩から連絡あつて、あたし達も百不思議に挑戦しろって！」

そう……七不思議ではない。

百不思議である。

この二人の通っている学校はかなりの曰く付きで、そう言った怪談物が数限りなくあるのだった。

「本当！ 千紗？」

「勿論！ それで内容は、夕方頃に学校の使われてない備品室に行くことだって。それで、怪談によれば、そこには、昔自殺した女の子が遺書につて遺したノートが、逢魔ヶ時になると現れるんだって。それを見つるってというのが、あたし達が挑戦することだってさ」

この二人の会話で大体分かったかも知れないが、二人の所属している部活は、『心霊研究部』という部活である。

だが、その名前の響きとは違い、普段のこの部活は、科学的な根拠を元に心霊現象を説明していくという、至って科学的な部活である。

この二人は、その部活の一年生だ。

だが、年に一度——三年生が引退してしばらく経った夏休みに、何故か一年生が、この学校の百不思議の中から一つを挑戦するという慣習がある。

そしてこの二人も、その順番が回ってきたということだ。

「それで、時間は？」

「今週の水曜日、夜の六時だって。先生もいって言ってたよ」

「ってことは、先生からも許可を得ているんだ」

「当たり前でしょ？ あたしはともかく、先輩がそんな手抜きするはずないよ」

……自分で分かって言っている所が、特に問題な発言であった。

「まあ、そりゃそうよね……それで、場所は？」

「旧校舎三階の北端の、さっきも言ったと思うけど、備品室。だけど、今は使われてないから、埃に気を付けないとね」

「ええ。ねえ千紗、今日暇？ 時間あるのなら、うちで遊ばない？」

「うん、いいよ！」

この二人の名前は、本条由梨亜ほんじょうと彩音千紗さいいん。

二人は、とても仲の良い親友だ。

しかし、二人はこの後に起こることを知らなかった。

知っていれば、断るに違いなかった、恐ろしいことを。

丁度、明日初めての任務に挑戦するという、火曜日のことだった。

「千紗」

「何？ 由梨亜？ 明日の確認？」

「違うの。あのね、千紗。明日……行かない方がいいよ」

「どうしてっ！」

「千紗、煩い。ちょっと黙って」

由梨亜は大声を出した千紗に注意をしてから言った。

「あのね、私の曾お祖母様は、この学校に通っていらしたらしいの。曾お祖母様は、本家から外れてたから。それで、私が明日、これに挑戦するっていうことを聞いて、注意して下さったの。曾お祖母様はこの、私達が試そうとしているこの怪談で、危険な目に会ったんだって。だから、この怪談は、飛ばされたんだって」

「何それ。由梨亜。それ、ほんとに信じてんの？」

「えっ？」

由梨亜は、きょとした表情で言った。

「あのさ、それって、どの曾お祖母さん？」

「……えーっと、お母様の、お母様の、お母様に当たる曾お祖母様よ」

由梨亜は、指を折って数えた。

「……その人ってさ、前、あたしが由梨亜の家に遊びに行った時に、私立の超頭がいいので有名な幼稚園から大学までの一貫校出身で、その中でも常にトップクラスだったって、あたしにすごい自慢してた人だよね？」

「……………」

由梨亜は、言葉が出なかった。

「これはあたしの想像だけどさ……多分、由梨亜の曾お祖母さん、由梨亜を心配して言っただけで、何にも根拠はないと思うよ……………」

千紗が恐る恐る言った言葉に、由梨亜は頭を抱えてしまった。

全く否定できないだけに、とても痛い。

「うん……多分、そうかも……………」

「じゃ、明日、予定通りにね？」

「……うん。ごめん…………千紗」

「いいって。ほら、行こ？」

「うん……………」

由梨亜は半ば脱力したまま、千紗と共に歩いて行った。

そして、その夜が来た。

「千紗〜！」

「遅い！　今まで何やってたの！？」

「えっ……。だって千紗。今、五時四十分だよ？　五時五十分集合
って言うてなかったっけ？」

「え……。アハッ」

「もう。ボケないでよ」

由梨亜が頬を膨らませて言った言葉に、千紗は笑いながら答えた。

「じゃあ行こっか」

「うん！」

「うつわ〜！　こんなに薄暗くって人氣もない学校って怖いね〜由
梨亜。何だか気味悪いし……。ねっ、由梨亜。あたしはこんなこと
するの初めてだけど。由梨亜はある？　あっ、そうだ、そういえば、
この中にあるノートって……」

「千紗！」

「はい！」

千紗は、思わず背筋を伸ばして答えてしまった。

……。ちなみにその叱責は、正直言って今まで聞いたどの先生や親
からの叱責よりも迫力があり、逆らいがたい物であった。

「煩い！　ちよつとは静かにしたらっ？　ほんとと言うと、私、怖い
んだから……。ちよつとただけだね」

「ふ〜ん……。ちよつと、意外かも……」

「いいから、さっさと行くわよ！」

「は〜い……」

二人は、薄暗い廊下を歩いて行った……。

「由梨亜、着いたよ」

「ええ」

「それじゃあ、行くよ!」

ガラツ、という音を立てて千紗と由梨亜が戸を開けると、使われていない机の上に、何かが一瞬ピカツと光った。

光は一瞬にして消えたが、千紗は構わずにその机へと歩き出した。

「ちょ……待つてよ! 千紗!」

呆気にとられていた由梨亜が、我に返って千紗を追いかけた。

千紗は追って来た由梨亜を従え、その光った場所へ行ったが、光った机の上に置いてあった物を見るなり、息を呑んだ。

「……ほんとに、ノートがあつた……」

「千紗……でも……でも、さ。これ……もしかしたら、先輩の悪戯かもよ……?」

「うん……でも、悪戯にしてはちょっと悪質じゃない?」

「うん……まあ、悪質って言えば、悪質だろうけど……ちょっとした、ドッキリかもね」

……既に、二人の中では『先輩の悪戯』と確定されてしまっている。

「うん……じゃあさ、これ、先輩に報告した方がいいよね?」

千紗は携帯端末という、地球連邦内ならどこでも繋がり、希望すれば立体映像にできる優れ物であり、大抵はみんな持っている物を取り出して言った。

「じゃ、あたしが柑奈先輩に電話掛けるね?」

「ええ。私って、こういうの持つてないもんねえ……」

由梨亜の溜息じみた言葉に、千紗はにやつと笑った。

「こういう時、お嬢様って不便だねえ」

「もっつ! いいから、さっさと先輩に連絡取ったら?」

「はいはい」

千紗は、すぐに柑奈に電話を掛けた。

その時、柑奈は苛々と携帯端末を手に取ったり置いたりと繰り返していた。

と、その時、いきなりコール音が鳴り、ぱつと携帯端末を手に取った。

「もしもし？」

『もしもし、柑奈先輩ですか？ あたしです。千紗です』

柑奈は、それまでの苛々とした様子を消し、手をぽんと打った。

「千紗？ …… ああ、そういえば今日だったね。 …… それで、どうだった？ 何か、見付かった？」

柑奈の悪戯っぽい言葉に、千紗が映像に映るように、一冊のノート掲げた。

『はい。こんなノートが置いてありました』

「へえ。こんなのがねえ。中身、見てみた？」

『あ、いえ…… まだです』

「じゃあ、見てみなさいよ」

『はい……』

柑奈は、しきりと千紗を急かした。

そのノートをパラパラと捲っていた千紗は、少し怪訝そうな顔になった。

「ん？ どうした？ 千紗」

『あの…… これ、普通のノートじゃないんですけど……』

「どんななの？」

『え…… と、何て言うか……』

『日記帳に見えますね……』

横から、由梨亜が顔を出して言った。

「ふ…… じゃ、しばらく二人でそれやっというて」

『はっ？』

『はいっ？』

二人は、揃って驚いたような顔になった。

『え〜っと……これを、ですか？』

「うん。そう。二人で交互にやっというて？ 一人だったらずっと一人でやればいいだろうけど、二人だからね。だったら、二人で交互にやったらいいんじゃないの？ あ、でも、後で見せて貰うことになるかも知れないから、見せられない内容は書かないこと。いい？」

『はい、先輩』

「それじゃあ、明日ね」

『はい。さようなら、先輩』

千紗と由梨亜はそう返事をする、端末を切った。

柑奈はしばらく端末を手に考え込んでいたが、一つの番号を押した。

短いコール音の後に、柑奈と歳が変わらない少女が出る。

『もしもし……柑奈？ もしかして、千紗と由梨亜から連絡来たの？』

「うん。見事に引つ掛かってくれたわよお」

柑奈は、につこりと微笑んと言った。

そう、これは毎年恒例の肝試し——というか、悪戯なのである。

『じゃあ、どうする？ 千紗と由梨亜で一年は全員終わったけど……ネタばらし、いつやる？』

「う〜ん……じゃあ、九月入ってからにしょ？ あんま早過ぎても、興醒めでしょ」

『じゃあ、また明日ね、部長さん』

「はいはい、明日絶対遅れないですよ？ 副部長さん」

二人はそう冗談のような口調で言つと、それぞれ端末を切った。

「じゃあ、先輩はああ言ってたけど、順番どうする？」

二人は学校から帰りながら、会話を交わしていた。

「ん〜、じゃ、由梨亜からでいいよ」

「ええ。分かったわ。じゃあ鈴南すずなが早く帰ってって言ってたから、急ぐわね」

鈴南とは、由梨亜付きの召し使いである。

けれど、その鈴南にしても、実は貴族階級のお嬢様であり、千紗よりも身分が高い。

そんな人間を複数人使用人として抱えている由梨亜は、それこそ真正正銘のお嬢様なのであった。

「うん。じゃ〜ね」

「じゃ〜ね〜！」

「あの由梨亜は、どんなことを書くのかなあ……」

由梨亜が去っていくと千紗は独り言を漏らし、そして角を曲がり、自宅へと帰って行った。

由梨亜は、屋敷の扉を潜ると、声を掛けた。

「ただ今戻りました」

すると、すぐに鈴南が出て来る。

どうやら、由梨亜が帰るだろう時間を待っていたようだ。

「お帰りなさいませ、お嬢様」

鈴南が頭を下げると、その後ろから、由梨亜の母が顔を覗かせた。

「あら、お帰りなさい。由梨亜」

「ただいま。お母様、鈴南」

「それでは奥方様、お嬢様。こちらへ。夕ご飯のお支度が整っております」

「ええ、鈴南」

第一章「日記帳」―2

「お帰りなさい！ お父様！」

その日の翌日、本条家の広い屋敷に、由梨亜の元気な声が響いた。
「ただいま、由梨亜。お前の誕生日の前までに、シャリート国から帰れて良かったよ」

由梨亜の誕生日は、八月十六日。

そして、何の偶然か、千紗も同じ誕生日だった。

今は、八月十四日だ。

「ところで由梨亜、明日は部活あるかい？」

「いいえ。夏休みは木曜の午前中だけなの。明日は金曜だから空いているわ」

「それでは明日、十八日にするお前の初めてのパーティーの為に、ドレスを買って来ようか？」

「ええ。それでは私、着替えて来ます」

由梨亜は部活から帰って間もなく父親——本条耀（よう）太を迎えたので、制服のままだった。

由梨亜は階段を駆け上がって部屋に駆け込むと、溜息を一つ吐いた。

「ふう〜」

（良かったあ。怪しまれなかった。お父様もお母様も鈴南も頭固いから、もしも見られたら大変なことになっちゃうわ。早速書こう！）

由梨亜はしばらく日記に何かを書いていたが、五分後、書き終えたのかその手を止めた。

「できた〜！」

（これ、明日……は無理だから、明後日渡そう！ あっそうだ！ 千紗に、その時一緒に招待状渡そう！ 私のパーティーに。ついでに、部活の人全員に、都合がつくなら招待状送ろうかな。ああ、楽しみっ！）

由梨亜が楽しげに心を弾ませていると、コンコン、という音がして、外から鈴南の声がした。

「お嬢様、お食事の時間にございます」

「ええ。今行くわ」

その翌日、由梨亜は耀太や母親の本条瑠璃^{るり}、他に荷物を運ぶ為と、運転の為と、車の盗難防止の為に車に残ってもらう為に連れてきた召し使い達と共に、本条紳士淑女高級店という、本条家が開いている店の本店に、わざわざ四十分も掛けて行った。

交通網が発達している今、四十分も掛けた移動というのは大事である。

本来なら屋敷に運び込んでもいいのだが、あまりにも品揃えが豊富だった為、それもできず、またいい物が揃っているのはやはり本店なので、時間を掛けることにしたのだった。

店に入ると、由梨亜は少し甘えるように言った。

会えない時は、一ヶ月以上も会えない相手でもあるので、自然とそうなってくるのだ。

「お父様。私、ドレスとか靴とか、青や白で統一したいわ」

「ああ。いいとも」

「あつ、このドレス可愛い！ 綺麗な色。この色も綺麗ね。ああ、迷ってしまうわ」

「由梨亜。どんなに迷ってもいいから、お前の気に入る物を買いなさい」

「はい、お父様」

結局由梨亜が買ったのは、裾が南国の海の海底が一段と深くなっ

た所のような深い藍色で、上に向かって少しずつ淡くなっているグラデーシヨンの長袖で膝下丈の、今時珍しい——つまり、かなり高価な——本物の絹でできたドレス、少しだけ灰色がかった白いエナメル靴、群青色の毛系のポンポンのような物を真つ白なレースでくるんだ髪留めだった。

「由梨亜。これでいいのか？ 他に買わなくて」

「ええ。だって、これと言えるアクセサリーが見つからなかったんですもの」

由梨亜は少し唇を尖らせると、すぐに笑顔になり、言った。

「でも、ドレスとか靴とか、気に入った物があつて良かったわ」

「そうだな」

その時、由梨亜は確かに何かの視線を感じたが、振り返ると、何もなかった。

（まただわ。また、何もない……この前も、その前も、そして今も、確かに誰かからの視線を感じたのに……）

「どうした？ 由梨亜」

「いいえ。何でもないわ」

「さあ、お乗り下さいませ。旦那様、奥様、お嬢様」

チャイムが鳴り、千紗がドアを開けると、そこには珍しいことに由梨亜の姿があつた。

「由梨亜！ 来てくれたんだあ。上がって」

「お邪魔します」

「一々言わなくても別にいいって！ ほらほら」

由梨亜は千紗に急ぎ立てられ、玄関を上がった。

「はい」

コトン、と千紗は、二人の前にお菓子の入った器とジュースを置いて、話しかけた。

「それで、どうしたの？ 由梨亜がうちに来るのって、珍しいよね？ って言うか、一年振りぐらいじゃない」

千紗は由梨亜に、単刀直入に訊いた。

「あ、うん。そうだね。はい、日記帳。うちだと、鈴南達の目が厳しくて渡せないの」

由梨亜はそう肩を竦めて言うと、千紗に手渡した。

「ありがと、由梨亜。じゃ、あたしが書き終わった後も、由梨亜に来て貰うか部活の時の方がいいね」

「ええ、そうね。あと、私の初めてやる誕生日パーティーの招待状。他にも、都合つく部員の人も招待するつもりよ」

「へえ。あっそうだ！ 由梨亜、あたし、由梨亜に今プレゼント作っている途中なんだ。楽しみに待っててよね？」

「へ。何作ってるの？」

「ブレスレットと、あとネックレス！」

「ふん。何色？」

「白とか、水色とか、青とかを組み合わせているの」

「そうなんだ。偶然だね。私も、千紗に薄いピンクや赤紫とかの、ブレスレットとネックレスを作っている最中なの。ちょっとびっくりだわ」

「じゃあ、交換するみたいだね！」

「そうだねえ」

由梨亜は、日記帳の存在を知られずに千紗に渡せたことをとても喜んでいた。

そして、次に回って来た時も、上手く出し抜けられるようにと祈った。

「それは……それは、どういうことだ。由梨亜！」

耀太の、怒りが燃え上がり、もう手が付けられない状況に陥った

罵声が、屋敷を揺るがすが如く響いた。

だが、由梨亜はそれに全く動じず、困惑したかのように、たった今言っただけの事を言った。

「何って……ただ、友達や先輩方を、私の誕生日パーティーに誘いたいって、言っただけじゃないの。これの、どこがいけないの？」

由梨亜が至つて不思議そうに言った為、耀太も怒りを少し抑え、こう言った。

「いけないも何も、大量の庶民を屋敷に招待するなぞ、前代未聞の珍事だぞ。過去には庶民の友人を招いたこともあったから、千紗はいい。しかし、その他の者を招いたことなど前例がない。いくら年上とはいえ、身分を考えればお前の方が上なんだぞ。本来ならば貴族であるお前が敬語を使われる立場であり、庶民に敬語を遣うような立場ではない。そこをきちんと踏まえておけ」

「……はい」

「分かったのならよい。しかし、部活部活と浮かれて勉強をサボるような真似はならぬ。鈴南、由梨亜に家庭教師が来る時間だ。先生をお迎えしろ」

「はい。畏まりました。お嬢様、お勉強のご用意を」

「分かっているわよ。鈴南」

「それでは由梨亜、先に行け。私は鈴南に話があるからな」

「はい、分かりました。それでは失礼します。お父様」

由梨亜が出て行くと、耀太は声を潜めて言った。

「鈴南」

「何でしょうか」

「由梨亜は、何故あのようになってしまったのだろう」

鈴南は額に皺を寄せ、難しい顔で黙ったかと思うと、小さな声で慎重に言った。

「お部屋にいる時や学校にいる時は、人権侵害に触れる為、監視は不可能です。ですが、その他の時……本条家の者が付き添わずに外出する時は、身の危険を回避する為という名目を持って、なるべく

目を離さぬように、召し使い達に手を回しておきます」

「さすが鈴南。そういう所もしっかりしている」

「お褒めの言葉、ありがとうございます。それでは、先生を迎えます」

鈴南が出て行くと、耀太は半眼を伏せた。

（鈴南に任せたら、大丈夫だと思うがな……）

「こちらも、手を回しておくか。用心はいくつ重ねても足りる物でもないし。私の可愛い由梨亜の為なら、害になる物全てを取り除いておかねば……」

由梨亜は耀太の言葉を扉の陰で聞いていたが、それを聞き遂げると足音もなく立ち去った。

千紗は、由梨亜が帰った後、すぐに日記帳の中身を見た。

「へえ」。由梨亜のお父さん、シャリート国から帰ってきたんだ。

そつえば、なんか嬉しそうだったよなあ、あの日。えっ……ゆ、

由梨亜……」

千紗は、思わずその文字を絶句して読み返した。

そこには、

『この日記帳を手にしてから、出掛けた時に視線を感じるようになったの。不思議よね。しかも、大勢の人がいても、沢山の車が走ってても、そこだけが視えないかのように、存在しないように、一人が余裕を持って立てるくらいの幅の空間が空いているの。その一瞬後には人や車が通ってその空間は埋まるんだけど……ま、気にし過ぎなのかもね。やっぱりこれ、どうしても先輩の悪戯としか思えないんだもの』

と書いてあった。

それに、千紗は思わず吹き出していた。

「全く、由梨亜だったら……ま、ほんとに先輩が監視してたら怖いけ

ど。でも……そんなのあり得ないし。やっぱ、気にし過ぎなんだよ、由梨亜」

そう呟きながらも、親友である由梨亜を心配しているのだろうか、千紗の顔にはあまり笑顔がなかった。

翌日、由梨亜は千紗の家に、勉強道具を抱えて行った。

一緒に宿題を片付ける為だ。

その途中、昨日のことを思い出した由梨亜は、申し訳なさそうに言った。

「千紗、ごめんなさい。お父様から、千紗以外は駄目って……」

「何で！ あたしがいいなら、他の人もいいはずじゃあ……」

「それが、大勢の庶民を屋敷に招待するのは、前代未聞の珍事。過去には、庶民の友人を招いたこともあったから千紗はいいけど、他の人を招いたなんてことはない。いくら年上とはいえ、身分を考えれば、私の方が上。本来ならば、貴族である私が敬語を使われる立場であって、庶民に敬語を使うような立場ではない。そこをきちんと踏まえておけて……お父様が」

「そっか。じゃあ、しょうがないよね……。でもさあ、由梨亜。何でこうなのかなあ。今のこの世の中、身分制度でガチガチに凝り固められて、階級重視じゃん。何も由梨亜を批判するわけでもないけどさ、お嬢様は幼稚園からずっと、あたし達庶民が通えないようなお嬢様学校に通ってるでしょ？ ホテルも、あたし達は一流な物なんていくらお金を出しても泊まれないし、二流の物はお金持ちの倍取られるし。貴族の人に遠慮して、庶民を近くに寄せないようにしているのかも知れないけど……でも、ここまで差が激しいと嫌になるよ」

「でも、昔から……そう、約四千年近く前の昔から、この制度は続いているのよ。その頃はもっと格差は大きかったけれど、今とはあ

んまり変わらないわね」

由梨亜はそう、溜息をつきながら言ったが、千紗の可笑しな様子に、首を傾げた。

「……………」

「千紗？」

「……………」

「ちよつと、聞いているの？ 千紗」

「……………」

「ねえ、千紗。千紗ってば！」

「あのさあ。由梨亜」

由梨亜が煩かったのか、それとも珍しく考え込んでいたのか、千紗はようやく口を開いた。

「あたし達って、今日、十三歳の誕生日だよね？」

「あつ……………」

ようやくその事実に気づいた由梨亜は、今までしていた会話が、あまりにも誕生日にそぐわないことだということに、やっと気付いた。

そして千紗は、さっきあんなに長々と現代の格差について熱く語っていたのに気付いて、黙り込んでしまったのだった。

その帰り、千紗は由梨亜に、由梨亜は千紗に、それぞれ青系、赤系で作ったビーズのネックレス、ブレスレットを渡した。

どちらも素晴らしい出来で、手作りの汚さはなく、手作りの良さのみがあった。

そして思わず由梨亜は、

「うわあ。千紗、ありがとう！ 丁度着るドレスが青いんだよね」と言って感激したのだった。

「何言ってるの！ お礼を言うのはあたしの方だよ！ 赤はあたし

の色って言われるし……本当にありがとう！」

お互いに感激しながらも、別れ道に来てしまった。

「それじゃあ、明後日の私の誕生日パーティーで！」

「うん！ また明後日！」

「はい、どうぞ。さっさと食べちゃいなさい」

「いっただっきまゝす！ うわ！ やっぱりお母さんのご飯美味しい！」

「全くもう。千紗つてばお世辞が上手！ ……そういえば、今はもう天国にいるお父さんも、私が作った料理をいつも美味しいって食べてくれたのよね……」

千紗の父は、千紗が五年生の時……つまり、二年前に交通事故で逝ってしまったのだった。

しみりしてしまった空気を払うように、千紗はことさら明るい声で、母親に話しかけた。

「お母さん、よく覚えてるよね。あたしだったら、そんな細かいことまで覚えてらんないよ。……そう言えば、明後日に由梨亜の誕生日パーティーがあるのね。それで呼ばれているんだけど、何着ればいいかな？ あたし、そんな余所行きの物、大して持ってないんだけど……」

「うゝん……そうねえ、私が前着ていた、薄い赤紫色のドレスは？ それに千紗。『そんな細かいこと』とは聞き捨てならないわ。貴女、初恋もまだなんだからそんなこと言えるのよ」

目を不気味にキラッと光らせながら言う母親に、千紗は苦笑しながら言った。

「こつちこそ、『初恋もまだ』とは聞き捨てならないよ。初恋ぐらい経験済み！ そんな、ドレスって、あのドレスのこと？ 濃い目の赤紫色で蔓草模様が刺繍されてるの。あれちよっと大人びてるよ

ねえ」

「――それはそうと、そう言えば千紗、夏休みの宿題は？」

いきなりの母親の話題転換に、千紗は反応が遅れてしまった。

「……………え、えつとお。それはあ……………そのお……………」

「つて、いうことは、まだ、全然手を付けてないわね？」

「ぜ、全然じゃあないんだけどお……………さっきも由梨亜とちよつとやつたしい……………」

「千紗！ 下らないこと喋ってないで早く片付けなさい！ さもないと……………」

「……………さもないと？」

千紗は上目遣いに、そつと母の様子を窺った。

「宿題持つて学校に行かせるわよ！ 丁度先生がいて、片付けるのがさぞ楽でしょうねえ？」

その、あまりにも恐ろしい言葉とにつこり笑った笑顔……………。

思わず千紗は身震いしてしまった。

「はい、はい！ すぐ片付けます！」

そう言つと、千紗は急いでご飯を掻っ込み、部屋へと走つていった。

それを聞いていた母は、思わずクスツと笑ってしまった。

「あの子は私に遣された、たった一人の娘……………。大事に育てなくっちゃね……………」

つい、そんなことを呟いていた母は、部屋から聞こえる声に、思わず破顔してした。

「あつれ。夏休みの宿題どこ置いたつれ？ えーっ。ない！」

その声が聞こえてくると、千紗の母親は、リビングのテーブルの片隅にその宿題があるのを発見し、ぷつと吹き出して言った。

「千紗！ 宿題ここにあるわよ！」

「えーっ！ うっそ！」

ドタバタと、凄い勢いで部屋から出て来た千紗に、母は思わず笑ってしまった。

「全くもう、千紗ったら」
母親はくすくすと笑うと、千紗に宿題を手渡した。

第二章「誕生日パーティー」―1（前書き）

今回、途中でかなり差別的な発言や、敬意が全くないような発言が出て来ます。そういう物が苦手な方は、ご注意ください。

第二章「誕生日パーティー」――1

八月十八日月曜日の午後三時、由梨亜ゆりあの誕生日パーティーが、本条家じょうけ本宅にて行われた。

だが、由梨亜はまだ子供なので午後三時から午後八時までの五時間だけだった。

由梨亜の家の門の前に行くと、本条家に仕えている、黒い、揃いのスーツを着た男性達と、薄手の白の長袖、踝丈の清楚な感じのするドレスを着て、髪をこれまた白いレースのリボンで高めの位置に一つ結びに結んだ女性達が、それぞれの招待状を一枚一枚確認していた。

千紗ちさは、緊張しながら、招待状を渡した。

それは、千紗が今まで見たことがない立派な模様と本条家の印章が綺麗に印刷してあり、門にいた召し使い達は、実に丁寧な態度で招待状と、目の前に置いてある端末機で招待状を出した人の名前が載っているリストを確認し（これは偽の招待状を使って潜り込まれないようにする為と、誰が来てくれたのかを確認する為である）、中の大広間まで案内してくれた。

千紗は、由梨亜の家には何度も行ったことはあったが、そのほとんどが由梨亜の部屋がある棟にしか入ったことがなく、おまけにこの大広間がある棟は由梨亜の部屋があるのとは別の離れている棟にあったのでこの大広間に入ったのは初めてだった。

そして、この大広間はとても広く、千紗の家が二つ入ってもまだまだ余裕がありそうだった。

天井はとても高く、三階までの吹き抜けになっており、大きな、本物のシャンデリアがいくつも輝いている。

庭から見ても一階部分の左半分はダンスフロアに、右半分は立食が
できたり座って食べたりできるようになっている。

そして一階から三階に掛けて、吹き抜けになっている。

庭と二階、三階はテーブルやベンチがあり、食べたり話したりが
できるようになっていた。

千紗は感嘆すると同時に、周りの様子を観察した。

やはり、千紗の年頃と同じような子供はいるが、少女達は千紗の
何倍も立派で真新しいドレスを着て、しかも全員一箇所に集まり、
談笑をしながら千紗や少年達を……特に、自分達よりもみすばらし
い格好をした千紗の方を、無遠慮にジロジロと眺めていた。

少年達は何人かずつ固まり、談笑しながら少女達の集団をチラチ
ラ見ていて、千紗のことは虫けらほどにも気を留めていなかった。

まあ、その反応は、千紗にとっては気楽なことだったが。

大人達は男同士、女同士で固まり、談笑していたり、その固まり
から抜け、ダンスの申し込みをしていたりしていた。

しかし、千紗がいくら見渡しても、人混みの中に目を凝らしても、
由梨亜の姿はない。

時間は、もう三時三十分になろうとしている。

（こういう風に時間が過ぎてから主役登場なのが、上流階級風なの
かな……）

と、千紗は思いながら、到って大人しく、静かに待っていた。

「由梨亜お嬢様、準備はお済みですか？」

すずな 鈴南の声が、由梨亜の部屋の前で聞こえる。

由梨亜は、ドレスの着付けを

「たまにはいいじゃないのよ。ほつといて。それに、こういうこと
も今のうちに経験しておいた方が将来困らないと思うし。だから、
ねっ、自分でやるから」

と、理屈になっているのかなっていいのかよく分からない理屈（我儘とも言う）をこね、言い張り、その勢いに反論できずに固まってしまった召し使い達を尻目に、部屋にドレスと靴を持ち込んでしまった拳句、内側から施錠してしまったのだった。

「由梨亜様、髪を結わなくてはなりませんから、お早く……」

「うるさいわねえ、鈴南。まだ三時じゃないの。終わったから、扉の前を退いて頂戴」

「はい」

鈴南はそう言って下がり、それを部屋の中から確認した由梨亜は、扉を開け放した。

そこには、この前本条紳士淑女高級店で買った、裾が南国の海の海底が一段と深くなった所のような深い藍色で、上に向かって少しずつ淡くなっているグラデーションの長袖・膝下丈の絹地のドレス、少しだけ灰色がかった白いエナメル靴を身にまとい、そこに千紗のプレゼントした青系のビーズで作ったネックレス・ブレスレットを付けた由梨亜の姿があった。

ネックレス・ブレスレットは、グラデーションだけの無地のドレスを邪魔せず、すっきりと収まって、由梨亜の若さ、まだ幼いからの独特の美しさ、大人びた気品を矛盾せず、それどころか強調して放っていた。

鈴南は、その勢いに吞まれたかのように見えたが、由梨亜のつけているネックレス、ブレスレットに目を留めると

「それは……？」

と、問いかけてきた。

「千紗がプレゼントしてくれたの」

と、由梨亜は茶目つ気たっぷりに、悪戯っぽく答え、その答えに思わず絶句し、彫像のように固まってしまった鈴南を、その場に置いて立ち去り、本来ならそこで着付けをするはずの部屋へと向かった。

そして、魂がどこかに飛んでいったような鈴南は、二、三秒後慌

ててその後を追った。

由梨亜がその部屋へ着いたのが三時五分だったが、髪をセットし、メイクを終えたのが三時四十五分だった。

鏡に映った由梨亜は、普段は少しフワフワと波打っている髪を真っ直ぐにし、毛先をクルクルと巻いて、それを首の少し上辺りで留め、その先を右肩の方へ垂らしていた。

その髪留めは、この前の買い物で買ってきた物だった。

顔は、睫毛にはマスカラを塗り、唇はほんのりと紅く染まり、目の上は薄い水色で彩られ、美しい美少女に……しかも、余所行きの格好をした大金持ちの家の令嬢となっていた。

いや、普通なら、この格好が普通なのだ。

由梨亜がお嬢様離れしていて、いつも庶民のような格好をしているだけなのだから。

「さあ、お嬢様」

と、促され、由梨亜は部屋を出て耀太^{ようた}、瑠璃^{るり}と合流し、大広間へと向かった。

千紗は、大広間で由梨亜がくるのを待っていた。

そこへ、

「その貴女。ちょっといいかしら？」

と、いかにも上品な声が掛かった。

「何ですか？」

と、千紗が振り返って言うと、そこにはさっきこちらをジロジロと眺めていた少女達の集団があった。

「ちよつと、伺いたいことがあります……お時間、宜しくて？」

「ええ、いいです」

「それでは、少し庭で……」

そう言うと、少女達は千紗をあまり目立たない庭の片隅へと連れ

て行つた。

そして、千紗を片隅に押しやり、少女達は腕を組んで一列の半円形になり、千紗が逃げられないように閉じ込めた。

「お前、私達のような上流階級ではないでしょう？」

と、先程大広間で千紗に声を掛けてきた、一番年上の、少女達のリーダー格だと思われる少女が、氷のように冷やかな声で千紗に話しかけた。

その言葉には、先程のような、美しい、丁寧な響きはなく、侮蔑や軽蔑するような響きが含まれていた。

「ええ、そうよ」

千紗は多勢に無勢な状況を、聞く人に全く思わせないような言い方で、身分の高い人にとっては不遜に、そして挑発するかのようになり、相手の顔を、顎を上げ、胸を張って答えた。

「あたしは、確かに貴女達に言わせればただの一般庶民、中流階級よ。親戚がそういうのになつたっていう人も、一人もいないわ。でも……それでも、あたしと由梨亜は親友よ。だから何だって言うの？ 何が悪いって言うの？ 身分の違いが、何よ。一体何になるって言うの？ この日本州を治めておられる天皇陛下だって、貧しく、それ故に泥棒をしたりして、地に這いつくばり、その日を生き永らえている人だって、みんな同じ人間よ！ 同じようにお母さんのお腹で育ち、母子共に痛い思いをして産まれて来た、人の子よ！ 気が合えば、友達にだって……いいえ、親友にだってなれる！ だって、同じ人間よ。そんなの当たり前過ぎるほど当たり前なことじゃない！ だからあたしと由梨亜が親友になつて、なにが悪いと言うのよ！ 悪いと思うなら、その理由をあたしが納得するまで述べなさいっ！」

千紗は色々と溜まっていたので、つい途中から声を荒げてしまった。

だから、すさまじい気迫で少女達に啖呵を切った千紗は、その気迫に少女達が飲まれたことを感じ、形成が逆転したことを確信した。

しかし、それは早計に過ぎなかったようだ。

先程の少女達のリーダー格だと思われる少女が自分を取り戻して、睨みつけながら言い返してきたのだから。

「んまあ、なんて汚らしいことを！ あんな野獣以下の下等生物と神にも等しい天皇陛下を同列に並べるだなんて！ 天皇陛下とそのご家族ご一族は神よ。神の子よ！ そして降嫁なされた天皇陛下の姫君とそのご家族、そして私達何代も続く貴族……そう、大商人や上流階級と呼ばれる一族が人間。そういう者だけが人間と呼ばれるのに値するのよ。残念ながら地球連邦の総人口の半分にも満たないのだけれどね。そしてお前達、一般庶民、中流階級と呼ばれる、この地球上に最も多くいる生き物達は半人よ。私達人間と下等生物達との中間。ありがたく思いなさいな。下等生物とも、野獣とも言われても仕方のない生き物を、『半人』と呼んであげているんだから。そして、お前がさつき言った最下層……あの下等生物達は野獣や溝鼠、そして泥よ。生き物ですらないわ。人間がそういった『物』と親しむのは、言語道断。今からでも遅くはないわ。お前と由梨亜様を今後一切近づけやしないんだから！ さあ、地に這いつくばり額を擦りつけて、許しを、私達の慈悲を請いなさい！ そうすれば、私達は人間ですから、考えてあげなくもないわ。あら、それとも……」

と、その少女は含み笑いをし、軽蔑しきった口調で言い放った。

「『半人』ですから……言葉も通じませんか？ 私達人間の上品な言葉は。ねえ、皆さん」

少女はそう言うとお上品に笑い、周りの少女達もそれに同調し千紗のことをなじりまくった。

「ほーらほら。早く謝らないの？」

「さあ、早く頭を下げなさい」

「いえいえ、土下座にすべきよ」

「そうそう。それでは、そのドレスを土で汚しなさい」

「そうね。それにそんな時代遅れのドレスなんて、もう既に汚れま

みれになっ ていますわ」

「それならば、もう少し汚れても、文句はいえませんか？」

「いいえ、それだけでは何か物足りませんわ」

「そうね。それだけでは足りませんから、額と顔を泥で汚すことにしましょう。ねえ、皆さん？」

「そうよ。異存はありませんよね、この『半人』っ」

「いいえ、半人とは、ちよつと……いいえ、大分美化し過ぎではないかしら？」

「ええ、そうですわ。これは奴隷よ」

「それに、奴隷は人間ではないわね」

「私達に使役される為に生まれてきた『物』よ」

「人権もないわ」

「口答えも許されなかつたわよね？」

「侮辱も、許されなかつたはずよ」

「直接手を触れることも許されないわ」

「私達『人間』の顔をまともに見詰めるなんて、生き恥もいい所ね」

「お前の本当に従順な先祖と比べたら、その先祖が泣くわ」

「それに、天皇陛下とそのご一族のことを口にする時は、地に跪き、額を擦り付け一言『自分のような「物」が貴方様方の御名を口にすることをお許し下さいませ。どうかご慈悲を』と言わなければいけないのでは？」

「ああ、それと最上級の敬語を使わなければならなかつたのではないかしら」

「それどころか、奴隷なんかは、滅多に声を出してはいけないはずよ」

「なら、この奴隷は、奴隷に認められている生存権違反を次々に犯しているわ」

「それなら、直ぐ様この奴隷を躰けなければね」

「感謝しなさい。公共機関に言い付けしないで、私達の手でやるんだから」

「ええ。それと、後で本条家の方々や私達のお父様やお母様にも言い付けなければね」

「それでは話がまとまった所で、その『物』、さつさとおやりなさいな」

「お前には、拒否権などと言う権利は……それどころか、生存権に定められている、『生きる』という権利以外は何の権利も持たないのよ」

「さあ、さつさとやりなさい。私達、そんなに長時間待てませんわよ」

「あら、ひよつとして、もしかすると……」

「本当の本当に、上品な人間の言葉が、お前みたいな奴隷には、通じないのかしら？」

以上、ほとんどの少女達の、千紗に対する侮辱であつた。

そのことに気分を良くしたのか、少女達は勝ち誇り、驕り高ぶつたように笑う。

そんな中、少女達の満足そうな、こちらを蔑む顔に囲まれた千紗の頭のどこかがブツツと音を立てて切れた。

「はあ？ あんた達、何言つてんの？ 気は確かですか？」

千紗は到つて穏やかに、それでいてどこかふざけているように聞こえる声で、言い放った。

千紗は、激情したり興奮したりした時は、先程のようにはつきりきつぱり言い放ち、見事に啖呵を切りまくるが、完全に切れてしまつと、ふざけたように、静かに、穏やかに、それでいて言葉の一言一句にすら、実に丹念に丹念に猛毒を仕込んだ毒針を地肌が見えなくなるぐらいにまでまぶし、それを伝えたいと思う人のみに、真冬の北極と南極を足して二で割らないぐらい冷たく、心を凍らせるように響く。

それでいて、関係ない人には全くそのようには聞こえない。

凄いの一言しか……出てこない。

「全く何を言つてるのかしらねえこの人達は。ほんつとくに全く意

味が解らないわ。あたしと由梨亜が、由梨亜の両親召し使い共々二年前に完全公認の親友だとも知らないでねえ。あんたらって、そんな頭もない産まれたての小鳥かしら？ それともミジンコ？ ミカヅキモ？ アメーバ？ アオミドロ？ ゾウリムシ？ ヤコウチユウ？」

千紗は、小学校の理科で習った微生物の名前を次々に挙げていったが、少女達は眉を顰めた。

「な、何よそれ。この世に存在しない、ありもしない想像上の名前を挙げて欲しくないわ」

勇気を取り戻した少女のうちの、千紗と同じ年の少女がそう言ったが、千紗は皮肉たつぷりにニコニコ笑いながら言った。

「あゝら。何言ってるの？ この微生物の名前を知らない訳？ おつかしいわねえ。あゝあ……あんた達は受験しなくてもいいし、そのまま黙ってても将来は保証されそうなんだけどねえ……最低限、義務教育の中で習った内容は覚えていて欲しいわねえ。それに、この微生物の種類を学ぶことは必修科目だったし……。ミカヅキモ、ゾウリムシ、ヤコウチュウ、アオミドロの名前を知らないのは、まあ、馬鹿過ぎだからしょうがないとしても、よ？ ミジンコとアメーバの名前ぐらいなら、ちよつと賢い幼稚園児でも知っていそうだけどなあ？ ああ、それとも今あたしが言ったように微生物程度の頭脳しか持ち合わせていない訳？ それとも、右から聞いたことが左へ抜けて行く竹輪耳？ 三歩歩けば忘れる鶏？」

「この……！」

と、少女達が気色ばんで大声をあげようとした時、絶妙のタイミングで、その気を挫くように、後ろから声が掛かった。

「お嬢様方、どうかなされましたか？」

皆が振り返ると、そこには本条家の、それなりに高い地位で仕えているらしい、召し使いの中でも立派な服装をした男性が立っていた。

少女達は、千紗の、皇族と貴族を卑下する、あまりにも傍若無人

な態度を告げ口しようと思ったが、生憎相手の名前が分からない。

もし自分の家や、自分と同じ階級、または自分より格下の家で使えている召し使いで名前が分からなくても、

「その貴方」

などと、呼びかければいい。

だが、本条家は地球連邦の上流階級のなかではトップクラスである。

様々な分野で活躍し、辺境に当たる地球連邦なものにも拘らず、地球連邦初の他星に支店を出店したほどで、だからといってお金儲けにしか目がない悪徳商売人ではなく、そうやって稼いだお金を地震などの天変地異や自然災害があつた所に全く惜しげもなく送り、世界中にいる貧しい人達の為に医療物資や食料、学業用品を送り、様々なことに寄付をしている。

極め付けが、何十代も続く大貴族である。

なので召し使いとはいえ、本条家に仕えている以上、ただ『貴方』と、軽々しく呼べないのだ。

そういう理由があり躊躇っていた少女の間をすり抜け、千紗はその人の下へと歩み寄った。

そして、千紗は何と、半ベソをかきながら、その人に訴えたのだった。

「坂本さん。あの人たちが、何だか分からないんですけど、何かあたしに身に覚えのないことを責められているんです……」

それを聞いた少女達は呆れ返ってしまった。

（あんなに私達を侮辱しておいて、その白々しさは一体何！）

と、全員が思った。

本気で呆れ返った。

しかし、そんなことは知らない坂本は、こう慰めた。

「千紗さん、大丈夫ですよ。貴女は分からないと思いますが、彼女達には、彼女達なりの誇りという物があるのですよ」

「そうなんでしょうか？」

それで少女達はようやく千紗の名前を知ったが、それどころではなかった。

何故かと言えば、千紗はうつすらと涙ぐんでいるだけではなく、声まで涙声になってしまっているのだ。

少女達は、あまりのことに、今度は膝がヘナヘナと崩れ、土にのめり込みそうになるのを堪えなくてはならなかった。

さすがにそれだけは、貴族の誇りに賭けてもできない。

そしてこんな腹芸は、今の自分にはできそうにない、と本気で思った。

また、何故一般庶民がこんな技を持っているのか、真剣に考え込んでしまった。

身分の上下に拘らず、商売をやっていたり政界に身を置いていたりする人間は、思ってもいないことや、物事を有利に運ぶ為の駆け引きを口にする……つまり、腹芸が重要となる。

なので、ある程度は子供のうちからできるし、やらなければならぬことだが、今の千紗のように堂々と口論し、啖呵を切り、相手を窮地に追い込みながらもその仕上げとして、召し使いとはいえ、見知っているとはいえ、事情を知らない相手に涙ながらに縋りつき、それを覚られずに丸ごと信じさせるなんてことは、まだ幼い彼女らには到底無理な話である。

それどころか、そんなことができる大人もあまりいない。

しかし、二度目になるが、本当に何も知らない坂本は、少女達を追い立てた。

「そうです。さあ皆さん。由梨亜様が来られますよ」

「はい。分かりましたわ」

そういうと、何とか持ち直した少女達はツンとすまして、千紗を睨みつけながら、部屋に戻っていった。

第二章「誕生日パーティー」―2

庭から見て、ダンスフロアの一番左端は、幅が十メートルほどある階段がどっしりと構えている。

そして、その階段を上って曲がると、それぞれ五メートルほどの幅の通路があり、その使用法は先程も述べた通り、食べたり話したりする場所である。

二階の食事スペースの奥には両開きの扉があり、そこから屋敷の中に入りができるようになっていた。

三階は、大きい階段や扉がないことを除けば、二階とほぼ同じだった。

千紗が、
（由梨亜はあそこからくるのかなあ……）

と、待っていたら、階段の横に司会者が立った。

（いよいよ始まるんだ……）

と思いながら時計を見ると、丁度四時になる所だ。

（上流階級つてのは……）

千紗は頭が痛くなるような思いをしたが、何とかそれを堪え司会者の言葉を聞くことにした。

『長らくお待たせ致しまして、申し訳ございませんでした』

千紗はこれを聞き、確信した。

このように待たせるのが普通なのだと。

一般的に考えれば、やっぱり時間が掛かったのかな、と思う所だが、千紗は声の響きから、ただの社交辞令に過ぎないと分かった。

『ただ今より、本条由梨亜様の誕生日パーティーを開催致します。』
本日は八時までと、大変短い時間ですが、皆様、どうぞお楽しみください。それでは、本日の主役、由梨亜様とご家族が入場されます！』

会場にいた全員は、ぱつと後ろを向いた。

そして、二人の召し使いにより、二階の両開きのドアが開けられ、そこから由梨亜と両親が入ってきた。

会場にいた者は皆、由梨亜の姿を、まるで光の妖精、海の精霊のようだと思った。

何故なら、由梨亜が身に纏っていたのは、まだ中学生という幼さにぴったりの無地のドレスだが、だからこそ放てる威厳という物があつたので、下にいた者達は固唾を呑んで見ているしかなかった。

扉から出てくると、三人は左側の通路を通り、階段で三人並んで下に下りてきた。

下に着くと、司会者は

『皆様、これからパーティーを始めますが、その前に、本日の主役、由梨亜様からご挨拶があります。それでは由梨亜様、お願い致します』

と言い、由梨亜に簡易拡声器を渡した。

『皆様、本日は私の誕生日パーティーにご出席戴きありがとうございます。本日は私の年齢のこともあり時間は短めとなりますが、どうぞごゆっくりお楽しみ下さい』

由梨亜はそう言い、完璧なまでに見事に貴族の令嬢に相応しい礼儀正しいお辞儀をして、父母の所へ行った。

『えー、皆様。本日の主役は由梨亜様でございますが、由梨亜様はまだ婚約者がおられませんので、本日は由梨亜様のご両親、本条ご夫妻が最初に踊られます』

そこで、耀太と瑠璃はお辞儀をして前に進み出た。

ダンスフロアの一階部分の壁は、一面は階段に、もう一面は庭に通じるガラス扉となっていたが、更にもう一面は紅色の垂れ幕に覆われ、こちら側からでは見えなくなっていた。

千紗は今までそこには一体何があるのだろうか、と考えていたが、その時に謎は解けた。

そこには最低で五十人、最高で百人ほどの楽人が控えて、と言うよりは、いつでも楽器を弾いたり吹いたりできるような体勢で待つ

ていた。

そして、指揮者が指揮棒をあげ、ワルツを弾き始めた。全員が見守る中、二人は見惚れてしまうほど優雅に一曲踊り、お辞儀をした。

拍手が一斉に沸き起こって、司会者は律儀に待っていたが、一分ほど経った所で、このままでは時間がずれまくって仕方がないと思ったのか、召し使いとしては失礼ながらも、拍手の途中で拡声器を使って大声を張り上げた。

『えー、皆様！ お静かに！ お静かに願います！ 皆様！！』

そして、ようやく静まった所で、司会者は司会の仕事を再開した。『皆様。ただ今、グラスをお配りしておりますので、少々お待ち下さい』

この言葉に千紗が失礼にならない程度に辺りを見回すと、カートを押している召し使い達が、大人にはシャンパンを、未成年やお酒の飲めない人にはジュースを配っていた。

『お飲み物が皆様の手に渡られたら乾杯を致します。それが終わられたら七時半まで自由でございます。楽人達は、基本的にずっと演奏を続けておりますので踊られていても構いませんし、皆様が今おられる所の後ろや二階や三階、お庭などで飲食をなさってもかまいません。しかし、七時半までにはここに今のようにお集まり下さい』

司会者がそうして話している間に、全ての人にグラスが渡った。

『それでは、皆さんにグラスが渡ったようですね。それでは、由梨亜様、お願い致します』

由梨亜が前に出て、左手に司会者から手渡された簡易拡声器、右手にグラスを持つと乾杯の音頭をとった。

『皆様、今宵は十分に楽しんで下さい。乾杯！』

「乾杯！」

と、皆が復唱し、一斉に飲み物を飲み干した。

そこから、空気は一気に砕けた物になり、それぞれ談笑しながら、食べ物を食べたり、ダンスフロアに出て行ったりした。

楽人達は、先程とは全員入れ替わり、ワルツを演奏し始めた。

千紗は、乾杯が終わってからすぐ由梨亜の元へと向かおうとしたが、先程の少女達がそうさせなかった。

「生意気よ」

と、小声で言うのと、さりげなく数人ずつ固まって散らばり、千紗が由梨亜の元に向かうのを阻止したのだった。

千紗は、そのせいだけではなかったが、由梨亜の元に向かうことを諦めざるを得なかった。

何故なら、少年達三十人のうち五人が由梨亜にダンスの申し込みをしていたからだ。

残りの二十五人は、そこら中に散らばった少女達を値踏みし、ダンスの申し込みをしていた。

ちなみに言うと、千紗にその目を向ける少年はただの一人もいなかった。

千紗は食事が並べてある所に行くと、食べ物がある程度取り、庭に行って食べ始めた。

千紗は、なるべくゆっくりと食事を摂り、一番建物から離れて座って、しかも二、三回ほどお替りまでしたが、五時半頃にはもう全て食べ終わり、お腹も一杯になってしまった。

そこで、仕様がなから、中に入って優雅な貴族のダンスでも眺めていようと中へ入った。

そして、ふと

（由梨亜って、まだ踊ってるのかな……？）

と思い、踊っている人の合間を縫って視線を巡らすと由梨亜がまだ踊っているのが見えた。

だが、相手の少年は先程の五人ではない。

一曲踊る分と、パートナーを変えたり、楽人が変わったりする為に曲の間に空く時間が、合計でおよそ十分は掛かることを考えると、時間的に見て今はだいたい九曲目なのだから、九人目となる。

千紗には由梨亜のニコニコとした笑顔が見えたが、その笑顔は他

の人が見れば普通にニコニコ笑っているなあと思うかもしれないが、千紗には由梨亜が疲れているのが見て取れた。

（由梨亜、よくそんなにできるなあ……）

と、思いながら、由梨亜が踊るのを眺めていた。

曲が終わると、由梨亜は相手と別れたが、また次の相手が来て踊った。

（由梨亜の相手をするぐらいの人が、このパーティーに最低十人……）

千紗はそう思うと目眩がしてきた。

本条家は上流階級の中ではトップクラス。

本条家とほぼ同等の上流階級の家はそれなりにあるが、敵対する家を除くとその半分以上になる。

その中でも、由梨亜と釣り合う年齢の子息がいるのは、更に半分……。

それに、いくら初めてとは言え、一人娘とは言え、このパーティーは『本条家の一人娘、本条由梨亜の誕生日パーティー』である。

なので、そんなに招いた、由梨亜の父、本条グループの再頂点に立つ本条耀太に対する思いが、感心を通り越して、呆れた物に変わってしまった。

由梨亜が踊るのは見ていて飽きず、飲み物を飲みながら一時間ほど見続けてしまった。

そして十五人目と踊り終わった後、ようやく由梨亜はダンスの相手から解放された。

そして、千紗は今度こそ由梨亜の所へ行った。

今回は、邪魔する少女達はみんな踊ってしまっていて、邪魔ができなかった。

ちなみに、その少女達は自分に申し込んで来た少年達と踊っている、

「しまった！」

と、思い、すぐに駆け寄って間に割って入れないことを悔やんだ

のだ。

「由梨亜！」

千紗は、由梨亜が解放されるとすぐに呼びかけた。

由梨亜もすぐに気付いて、

「千紗！」

と、返した。

「由梨亜……大丈夫？」

と、千紗は思わず声をかけてしまった。

何故なら由梨亜はとても疲れ切っていて、見ているほうが疲れるような様子だったからだ。

「もう駄目、絶対に踊れないわ。十五人と踊ったんだもの。これ以上踊れて言われたって脚が疲れていて無理だし、お腹もペコペコよ。絶対に踊らなきゃいけない義理や縁のある人とはもう踊り終わったし、これ以上申し込まれても断れるし私自身断る気にいるからもう大丈夫！ 後はゆっくり休めるのよ！」

「じゃあ、お庭で夕ご飯食べなよ！ あたしはもう食べ終わっちゃったから飲み物でも飲んでさ！ 丁度いい穴場があるんだ。あんまり周りから見えないから、内緒話とかするのにすっごい丁度いいの！」

「そうなんだ。じゃあ、そこで食べたり飲んだりしよっか」

そして、由梨亜は一人で食べ切れるのかと思うほど沢山食べ物盛った二皿のお皿が乗ったカート、千紗は大きめのコップを二つに更に大きな入れ物に入った飲み物が二本乗ったカートを押して、千紗の言った穴場——つまり、千紗が食事をした所に向かった。

そして、食事をしながら、他愛のない話をしていた。

つまり、こんなに大きなパーティーを開くと一体どれくらいお金が掛かるのだろうとか。

こんなに人が来ていたら、顔も名前も覚えていられないとか。

夏休みの宿題が、どれくらい終わったとか。

部活のこととか。

この前やった、百怪談で見つけた、何の変哲もない日記帳のこととか。

そして、由梨亜が食べ終わると、千紗は本題に入った。

「由梨亜、あのね、ここに招待された女の子達いるでしょう？ その子達に言われたの。あたしと由梨亜を近付けさせないって」

そして、千紗はさっきの少女達との言い争いの内容をほとんど正確に、しっかりと伝えた。

もしその少女達が千紗の言うことを聞いたら、真っ蒼になって逃げ出すこと間違いなしだろう。

何故なら、第一に由梨亜にそんなことを聞かれたら、今後社交界での彼女達に対する由梨亜の心証が悪くなるだろうし、第二に彼女達は、千紗のようにそこまで正確に会話の内容を復唱することは全くもって必要のないことであるし、実践する機会すらないので、そのこと自体に恐怖を覚えるだろうからである。

そして、それを聞いた由梨亜は、思わず笑ってしまった。

「千紗……い、いくら何でも、て、天皇陛下と、物乞いや奴隷を……同列に、並べるなんてっ……！ スケール大きい！ そんなの誰も思いつきやしないよ！ さっすが千紗！」

由梨亜は時間を掛けてようやくそこまで言っていると、身体をくの字に曲げ、声を殺して大爆笑した。

「由梨亜……笑うか話すかどっちかにして……」

千紗のそう呆れ返った意見は、千紗にしては珍しくしっかりした物で、周りからの賛成も得られそうだった。

「まあ、でも彼女達も言い過ぎね。半人やら野獣やら下等生物やら。それに、奴隷だなんて……一体何千年前の話よ。今のこの世の中に、奴隷なんている訳ないのにね」

「ん」。でもあたし、あいつらが『奴隷に生存権がある』って言う

たことに驚いたな。だって生存権って、『健康で文化的な最低限の生活を営む権利』でしょ？ あの人達の、その前後の発言とは矛盾してると思うんだけどなあ。それに、人権はないのに生存権はあるって……矛盾の塊じゃない」

「まあ、知らなかったんじゃないかしら。あの人達は無知な貴族の典型例だからねえ。知らなくっても不思議じゃないわ。あの人達、生存権をただの『生きる権利』とでも勘違いしてたんじゃないかしら。でも……」

そういうと、由梨亜はクスツと笑った。

「千紗が切れるなんて……よっぽど頭が悪い上に口も悪いのね。それに、『貴族』という身分でガチガチに固まっている、『偏屈婆あ』の予備軍よ」

そう断言すると、由梨亜はヒソヒソ声で千紗に話した。

「ねえ、千紗。相談したいことがあるの」

由梨亜のさつきとは打って変わって真剣な顔と口調に、千紗も半分笑っていた顔を引き締め、千紗も真剣に問い返した。

「何、由梨亜？」

「あのね……夏休みに入る一ヶ月くらい前、席替えがあつたでしょ？ その時、私の隣の席、藤咲香麻君ふじさきこうまになったの、覚えてる？ それでね、話しかけられた時、笑いかけられた時……。胸が苦しくなつて、ドキドキしたの。ねえ、千紗。これって、一体何？ すっごく、辛くて……」

「由梨亜……」

千紗は、思わず呆れ返ってしまった。

由梨亜が『お嬢様』だということは、千紗も重々承知していたが、ここまでの箱入りだったとは――。

「ねえ、千紗、教えて」

「由梨亜……それはねえ……貴女は香麻君のことが好きなのよ」

「そ、う……なの？」

「由梨亜、初恋してたことないの？ って言うか、たとえ初恋が

まだだったとしても、よ？　そういうの、小説とかドラマとかアニメとか漫画とか……そういうので、知らなかったの？」

千紗は、呆れてしまった。

そして、

（まさか……そんな分かりきったことを訊くなんて……）

と思い、思わず溜息が出てしまった。

「ええ。まだなの。と、言うよりは、恋って物——好きっていうことが、よく分らないのよ」

「そうなんだ……。ところで、由梨亜」

千紗は、先程の重い溜息とは打って変わって、明るい口調で言った。

「その、あたしがあげたアクセサリー、全部付けててくれたんだあ」
千紗は、感激したように、続けた。

「由梨亜、やっぱりお嬢様だからさ、アクセサリーとかも一杯あるでしょう？　それに、いくらでも気に入った物はバンバン買うことができるし……だから、新しいドレスを買ったとしても、それに合わせてアクセサリーも買ったりすると思ったから、あたしの作ったのなんて、付けないかと思ってたよ。精々が、持って来るくらいでそれに、たとえ付けることがあっても、こういう大きいのでは、絶対に付けないと思ってた。なのに……」

「もっつ！　千紗ったら、馬鹿じゃないの？　折角千紗が私の誕生日の為に、手作りで作ってくれたんだよ？　そんな大事な一生の宝物、私が付けない訳ないじゃない！　それに……」

と言うと、千紗の方を見た。

そして、にっこり笑って言った。

「千紗だって、私が作ったの、付けてくれてるじゃない！」

「それこそ、その言葉そっくり返すよ！」

二人でひとしきり笑った後、七時三十分が近づいてきたので、会場に戻って行ったのだった……。

第三章「婚約者」― 1

由梨亜は、とつてもご機嫌だった。

日記帳は先輩の悪戯だと思っていながらも、先輩に直接訊ねることはできなくて少し苛々していたが、自分が初恋と言う物を体験できたことが分かり、千紗に貰った誕生日プレゼントのアクセサリーが気に入ったこともあり、その日はにこにこしっぱなしだった。

ある、耀太からの報告を聞くまでは。

その翌日、由梨亜が部活に行つて帰ってきた午後のことだった。

「由梨亜、話がある。ちょっと来てくれないか」

そう耀太に言われ、由梨亜は客を迎える応接間へと向かった。

由梨亜がそこではらく待っていると、鈴南すずなが誰かを連れて来た。「失礼致します。どうぞ、こちらへ。由梨亜お嬢様がお待ちでございます」

「失礼します」

と、由梨亜と歳の近そうな少年が三人……。

由梨亜が呆気にと取られていると、最初に入つて来た、どこか気取っている少年が、取つて付けたような微笑を顔に浮かべ、挨拶した。「初めまして。僕は眞湖グループ第百三代総帥眞湖翔暮まいくの三男、眞湖聡まいくと申します。歳は十六です。貴女のような素晴らしい女性と知り逢えた僕はかなりの果報者でしょう。どうぞ僕のことをお忘れなきようお願いします。そしてこれから宜しくお願い致します」

と、昨日の由梨亜の誕生日パーティーで一緒に踊つたので初対面ではないものの、たつたの二回目の由梨亜を口説き優雅に一礼し下がると、厳つく頑丈な身体付きの少年が挨拶した。

「初めまして。僕は蔡条グループ第百十四代総帥蔡条瑛彦えいひこの弟の三

男、蔡条護まつろと言います。僕の二人の兄は子供のいない伯父の為に養子となり、一番上の兄は蔡条グループの跡取りとなりました。その為、僕がこのような晴れがましい榮譽に浴することとなり、とても光栄に存じます。歳は十五です。宜しく願います」

見た目とは大変裏腹に、かなり優しい口調で（演技かも知れないが）自己紹介と自分の宣伝を行うと、サツと一礼し、今度は護とは対照的な、あまり筋肉もついておらず、痩せていて、少し青白い顔で眼鏡を掛けた、学者タイプの少年が挨拶をした。

「初めまして。その、僕は紺城こんじょうグループ第九十八代総帥、紺城智早ちはやの四男で、紺城早宮さみやと申します。歳は、その、由梨亜さんと同い年で十三です。このような大役が、僕に務まるかどうかは分かりませんが、精一杯頑張るつもりでいるので、宜しく願います」

そう早宮が言い、頭を下げて一歩下がり、由梨亜は他の二人と並んだ三人を、眺めながら、

（さつきから『果報者』やら、『晴れがましい榮譽に浴する』やら、『大役』やら……一体、何を言っているのかしら……？）

と思い、由梨亜は自分の隣に立っている耀太を見上げ、訊ねた。

「お父様……この方達……は？ 何故、今日家にいらっしゃるのでしょうか？」

「由梨亜、この方達は、由梨亜の婚約者候補だ」

「……………はいっ？」

裏返った声で、由梨亜は言った。

たっぷり、十秒間の沈黙だった。

「由梨亜、お前ももう中学生だ。婚約者を決めなくてはならない。今はまだ決めなくてもよい。だが最終的に、遅くても大学に入学する時に決める。時間はまだたっぷりあるからな。但し、この中の三人から、絶対に選べ」

耀太はそう由梨亜に言うと、

「さあ、今日は対面だけだからな。今後は、毎週土曜日の午後か日曜日に来てくれ。それでは、ありがとう。また来週」

そう言うと、耀太は

「鈴南、聡殿、護殿、早宮殿をお送りしてくれ」

と言い、部屋を去り、聡、護、早宮の三人は、

「それでは、由梨亜さん。また来週お会いしましょう」

とそれぞれ言い、鈴南に連れられて出て行った。

皆が部屋からいなくなった途端、由梨亜は近くのソファ―に座り込んでしまった。

（そんな……せっかく、初恋ができたって言うのに……まあ、私は本条家の跡取り娘で、婚約者候補の存在がいるってことを忘れていた私も悪かったんだけど……）

そう思うと、もうやる気がなくなってしまふ。

（せめて、携帯端末で千紗に連絡とってこのこと伝えないと……って嗚呼！ 私、端末は内線用しか持ってないんだっ！ 千紗に外線で連絡しようにも、鈴南とかが見張ってる中で、どうしたらあんなことを言えるっていうの！？ 嗚呼、もう……無理だよ……）
しかも、夏休み明けでもある、五日後の月曜日の二十四日にならなければ、部活すらない。

こうなってしまうては家から出ることすらも怪しまれ、出られないので、千紗の家にも行けない。

我慢して、耐えるしかなかった。

五日後、由梨亜は教室に行くと、真っ先に千紗に声を掛けた。

「ねえ、千紗。ちょっと……いいかな？」

「どうしたの？ 由梨亜」

「ちょっと、ここだと話にくい話だから……昼休みに、いい？」

「うん、別にいいよ？ で、どこで話せばいいかな？ 教室なんか論外だし……校庭だと、運動部とかが昼練しに来たり、遊んだりする人がいるし、食堂も……」

「だったら、屋上とか……どう？ 屋上の、東屋みたいになってる、緑で囲まれていて、でもベンチのないとこ……」

「うん。わかった。じゃあ、ついでお昼屋上で食べない？ お昼食べながら話すような内容じゃなかったら、食べ終わってからでもいいし」

「ええ……そうね」

「じゃあ、あたし先生に許可取ってくるね」

「うん……お願い」

そう言った由梨亜の姿は、頼りなく、儚げで、長く由梨亜という千紗には、何か思い悩んでいるということが分かった。

千紗は珍しく眉根を寄せて考え、結局答えは出なかったが、昼休みになれば分かることだ。

千紗は難しいことを考えるのを放棄し、とりあえず授業に集中することにした。

昼休み、二人は朝約束したように、屋上で食べていたが……二人とも無言で食べていた。

食べ終わった後、千紗は由梨亜に言った。

「ねえ、由梨亜。何、あたしに教室じゃあ言えないことって？ 何のことなの？ お弁当も食べ終わったし、言って？」

「うん……。あのね、千紗。五日前、あの私の誕生日パーティーの次の日、お父様が、十六歳で、眞湖家の三男の聡さん、十五歳の、蔡条家の会長の弟の息子さんと、二人のお兄さんがその伯父さんの養子となった三男の護さん、十三歳で紺城家の四男の早宮さんが……私の、ね……婚約者候補として、来たの。それで、高校を卒業してから大学に入る前の冬休みの間に、その三人の中から、婚約者を決めるって。ほんと、私……」

そう言つと、由梨亜は涙ぐんだ。

ちなみに、この全世界では、基本的に新年を迎えると同時に進級することになっていて、地球連邦も同じだ。

「あ……ちょっと、いい？ 由梨亜」

「何……？ 千紗……」

「あの、さ…… 由梨亜、まさか三人と結婚するわけじゃないでしょ？」

「うん……そうだけど……？ 何当たり前のこと訊いてるの？」

「ってことはさ…… 必ず二人は選ばれない訳でしょ？」

「うん」

「選ばれなかったら、どうするの？」

「それは、ちゃんと男の跡継ぎがいる場合の女の子、または私みたいに女の子しかないけどその子に姉がいる子とか、とにかく跡継ぎじゃない女の子と結婚するの。まあ、相手が一般庶民の漫画みたいな大恋愛もあるけど、確率としては、一パーセント未満ね。で、私みたいな跡継ぎ娘と婚約する場合、聡さん、護さん、早宮さんにとって、私は『第一婚約者』なの。で、さっき言った、跡継ぎじゃない女の子が『第二婚約者』。私が結婚した人の第二婚約者は結婚できないけど、将来にはいくつか方法はあるわ。まず、行かず後家になって一生屋敷に残る道。だけど、その道を選ぶ人は非常に少ないわ。第一、特別な理由がない限り親兄弟が追い出すわね。余程その家に役立つような特殊能力を持っていたり、とても外にもお嫁に出したりできないような人じゃない限り」

由梨亜はそう言っただけを疎めた。

「あと、自分の興味の高い物とか、自分に向いている分野を、専門学校とか大学とかで技術を手にいれて、庶民として一人暮らししながら働くの。それと、自分の家より身分の高い家に仕えることね。私の家で働いている女性は、ほとんどそうよ。鈴南だってそう。男性で働いている人は、特に次男が多いわね。何て言ったって、長男に子供ができずにもしものことがあれば、その後を継ぐのは次男だもの。他家にお婿に出したら、その結婚した人の子供がすごい迷

惑を被るわ。だけど、他家に仕えさせればその家との縁もできるし、いざとなったら仕事を辞めさせて家を継がせることもできる。

お嬢に出すよりかなりお得よ。もしくは、男女両方ともだけど、一般庶民と結婚する場合もあるわ。確率的に多いのは、他家に使える、一般庶民と結婚、独り立ちする、行かず後家の順番ね」

「へえ……そんなことできるんだあ」

「まあ、結婚の場合、九十九・九パーセント政略結婚なんだけどね」「はっ？」

千紗は、思わず訊き返してしまった。

貴族との結婚なら、政略結婚なはずだが、一般庶民との結婚なら、該当しないはずなのだ。

一体、何故――。

「一般庶民と言っても、本当は違うの」

「……え？」

「一般庶民って言っても、それなりに力はあるけどまだ一代目、二代目の成り上がりとか、お金をがっぽり溜めて寄付も何もせず富豪と呼ばれる家、それに政治家……その人達も貴族と庶民の区分で見れば庶民に入るから、政略結婚で庶民と結婚なのよ。それに、たとえ独り立ちしても、結局働く所は、自分の親とか親戚とかの会社や、その会社と繋がりがあある会社。そしていざ結婚するとなっても、その会社の有力者と結婚してその伴侶が自らの家を裏切らないように……もしその伴侶が裏切ろうとしたら、自らの生命を懸けてそれを止める……見張り役。それが敵対する会社、同じだけの力を持った会社……もしかしたら、将来自分達に危害を加えるかもしれない会社の人と、事実上の人質として結婚するわ」

由梨亜はそう言うと、悲しげに目を伏せた。

「それに、この人と結婚したいと思って結婚する人は、ほとんどいない。私達は、そう言う風に育てられてないもの。私だけが例外な訳で……。まあ、他にもそういう人はいるかもしれないけど、その結婚したいと思っている相手がその家の条件に合わない人だったら、

絶対に認めないわ。何があっても阻止しようとする。まあ、その条件に合わない人と駆け落ちしたらひとまず諦めるけどな。でも……もし、子供が産まれたら……最悪よ」

「えっ……何で？」

（駆け落ちしたら諦めるのに、子供が産まれたら最悪？　つまり、諦めないってこと？　普通、逆なんじゃないの？）

千紗は、全く分からなかった。

「子供が産まれたことは、戸籍を見れば分かるもの。どんなに隠そうとしても。役所の人間も、貴族には逆らえないでしょうね。そして、どこにいるのか見つけ出したら、その子供は実の祖父母の命令によって、親から誘拐される。そして、その両親は二度と子供に会えないまま一生どこかで働く。時にはその二人すら引き離すこともあるわ。でも……でもね、もし見つけれなくて捕まえられなかったら……そして子供がある程度大きくなったら、認めてくれるの。そして自らの娘、息子、孫として認められて、様々な便宜を図ってくれるわ」

「そうなんだ……でも、由梨亜は……」

「ええ。私には、できないわ」

そう言った由梨亜の顔には、諦めの色が濃くあった。

「私には兄弟姉妹がないし、父方の叔父さんや大叔父さんなんていないから、他に直系の跡継ぎはいないのよ。この本条家の跡を継げるのは、この私、ただ一人だけ。たとえ駆け落ちしたとしても、捕まって、家に閉じ込められて、一生、自由に外には出れなくなる……」

由梨亜の疲れたような、諦めたような声を聞き、千紗は胸が痛くなつた。

「でも、諦めちゃ駄目！」

千紗は激しく、強く言い放った。

「千、紗……？」

思わず呆気にとられる由梨亜を尻目に、千紗は立ち上がって言う

た。

「あたしは、人を好きになるって、そういう物じゃないと思う！勝手に決められて、好きでもない奴と無理やり結婚させられて、『後からいくらでも好きになれる』だなんて勝手なお題目を、さもあがり得そうに言い切って……そんなの、生き物のすることじゃないよ！そして、そんなことをさせる奴は、絶対に生き物の生き方を知らないし、知ろうともしない！少なくとも、普通の生き物の心なんか持っていない！由梨亜、諦めたら駄目だよ！絶対に！」

「千紗……そんなことよりも……」

「何?! そんなことって!？」

「お弁当箱」

「……オベントウバコ？」

千紗は氣勢を削がれ、ぽかんと間が抜けたように、オウム返しに言ってしまった。

「お弁当先に食べ終わってて良かったね。お弁当箱、膝から落ちて、転がっちゃってるよ」

「ちよつ……ちよつと、由梨亜！気付いてるなら早く言ってよ！

あゝあ、お弁当箱が砂まみれ……お母さんになんて言おう……」

その呆然とした声に、笑いを噛み殺しながら、苦笑するように、たしなめるように言った。

「千紗、何かを乗つけてそのまま立ったらどうなる？それは見事に従順に、重力従って落下するでしょうが。それに人の話に途中で割り込むだなんて、人としての礼儀に反するわ」

「あつ……そつか……」

「まったくもう。千紗ときたら。あつそうだ」

由梨亜は、なにやら鞆をゴソゴソと探った。

「えゝつと……あつた！はい、千紗。遅れてごめんね。これ、もう書いてただけど、あの婚約者候補のことがあって、お父様と鈴南達の目が厳しかったから、外に出にくくて。ごめんね」

「そつか……ありがとう、由梨亜。でもさあ、この交換日記帳って、

本当に先輩達の悪戯なのかなあ？」

「えっ？」

「だってこれをするようになってから、由梨亜が変な視線感じたり、婚約者候補がいきなり出てきたりしたんでしょう？ 何の前触れも予兆もなしに。それって、変だよ。そんなの、いつだっていいのに。これは、偶然って言うの？ もしかして、何かの力が働いているんじゃないのかな？」

「ま、まさか……ただの偶然よ。千紗らしくないわ。全然、科学的じゃないわよ」

「……だけど、きっと何かあると思う。だって、これ、変だよ。それに……悪戯ごときで、先輩達があたし達をつけるとは思えないし」「うーん……そんなこと言われても、ねえ……じゃ、今日の部活の時、先輩に問い質してみましよう？ そうすれば、私の勘違いだったって証明されるかも知れないし」

由梨亜が明るく言った途端、女性の澄んだ声が……ただし、男のような口調で、二人の耳に届いた。

『よく、分かった』

「えっ……」

「嘘……」

二人が驚いたのも、無理はない。

何故なら、その声は、千紗が持っていた日記帳の中から聞こえてきたのだから。

「日記帳が……喋ったのかしら……」

「ま、まさか……あり得ないよ……もしかして、先輩達……こんなのに、小型スピーカー付けてた、とか……？ あ、あと、盗聴器……？」

あまりの出来事に現実とは思えず、啞然呆然としている二人を余所に、交換日記帳は眩しい金色に輝いている。

『お前達の望みを叶えよう。さあ、行くのだ。自由な、千年前の世界へ……！ お前達の、真の姿を取り戻す為に……！』

（千年前……確か、その時身分同一化運動が起こって、成功して……一時的に……確か二百年間、身分の同一化運動に成功したから、世界は身分社会じゃなくて完全な学歴社会になって……身分の面では、確かに……確かに、自由で！）

そこまで、千紗が一瞬のうちに考えた途端、直視すれば失明してしまうかも知れないほどの、眩い光が駆け抜け……。

そして、その光がやつのことで去り、目を瞑ったりしなくても見えるようになった屋上には、何と、由梨亜と千紗の姿が、跡形もなく消えていた。

しかも、その光に気付いた人物は、誰一人としていなかった。

二人は空間と空間を繋いでいる、『何だかよく分からないトンネル』にいた。

と言っても、正確には、二人がしっかりと手を握り合ったまま、矛盾しているとは思うが、無重力に似た足元の心許なさを感じたまま、下に向かって落下しているのだが。

周りは一体何色と言ったらいいのか……それとも言葉で言い表せないのか……様々な色が輝き、けれど混ざって汚い色にはならず、色が流れていると言う表現がぴったりだ。

そんな中を下に降りていくと、下にしっかりと固定された色が――いや、景色がある。

そして、そこに近づくほど、キーンとした音が、強くなり、強くなり……そして、様々な色が輝くトンネルから吐き出される瞬間、二人はあまりにも大きな、大きすぎる音によって、気絶してしまっ

た。
気絶してしまうその瞬間の少し前、千紗の耳には、鈴を振るような、高く澄んだ、綺麗で不思議な声が聴こえて来た。

『何も、怯えることは御座いませぬわ。貴女とその友の、乱れ絡ま

り合った運命を、元に戻すだけなのですから……。貴女にとっては、とても、とても辛いことでは御座いますが、それが——貴女の身体で感じ、体験した、それだけが、真実で御座います。元に戻るだけなのですから……。落ち着かれて、全てを、御受け入れ下さいませ……」

（何言ってるの？ この人。あたしと由梨亜の絡まり合った運命って、一体……。何？ 何なの？ 元に戻るって？ 受け入れるって？ たって、何を受け入れればいいの？ もう……。もう、訳分かんないよ！ って言うか、何この敬語！ こんな敬語、普通は使わないでしょ！）

千紗は少々変なことを考えながらだったが、由梨亜と千紗は、二人にとっては異世界としか言いようのない時代に、飛ばされていた。生活習慣は勿論、言語までもが違う時代へと——。

第三章「婚約者」―2

「千紗……千紗！」

珍しい由梨亜の慌てているような、急かすような声が聞こえ、千紗はこの時代で目覚めた。

「由梨……亜？　ここって、一体……」

「分からないの。私もたった今日が覚めた所で……」

と、由梨亜は泣きそうな顔で言った。

そこへ、ドアを開き、一人の女性が入って来た。

「――？」

「えっ？」

「何て言ったの？　解る？　由梨亜」

「いいえ。私にも、さっぱり……」

「――？　――？　――？」

「千紗、私、この女の人は何て言っているのか確実に答えられないけど、大体の意味は解ったわ」

そう言つて溜息をついてから、由梨亜は言った。

「『すみません。あの、何て言っただんですか？　もしかして言葉が解らないんですか？　私にも、何て言ってるのかさっぱり解らないんですけど……』って」

そして、そこにいた女性は、また何やらよく解らない言葉を発し、いきなりドアを開けて、飛び出して行った。

千紗は、まだ目覚めてからあまり時間が経っていない為、どこかぼんやりとしていたが、由梨亜はそれよりも前に目が覚めていたのだ、頭が少しはつきりしていた為、何とかパニックになりそうな気持ちを抑えてから周りの様子を観察した。

そこは全面白い壁になっている小さな部屋。

出入り口の所には水道があつて、手が洗えるようになっていた。

他には、とってもとっても古い、小さな冷蔵庫と思われる物、あ

とは、歴史の授業で習った、だいたい千年ぐらい前まで使われていた、テレビと言う情報を得る為の端末、二人の寝ている、二つのベッド……。

辺りは、薬臭いような、消毒液の臭いがして……。

そこまで考えた途端、直感的に、由梨亜にはここがどこだか分かった。

「千紗、ここ病院よ」

「えっ？　でも病院の普通病棟って昼間は階全部が一繋がりで、場合によって隔壁装置を作動させる明るい場所でしょ？　ここは何だか暗い雰囲気だし、ここじゃあ治る病気も治らないよ」

「ええ。だから、ここはそんな装置もなく、そんな分かりきったことも分からない……大分昔の、時代。それも、何百年前、って言う……」

「ここって、やっぱり……千年前の世界なのかな……」

そこまで言った時、さっきの女性——そして、ここが病院だとすると、恐らく、看護師と思われる女性が、様々な人を連れて来た。

その人達は十人ほどだった。

そして、恐らくその人達の母国語であるような、先程の女性とはまた違っている言葉を喋っていたが、ほとんど分からなかった。

だが、中に一人、言葉が少し解る人がいた。

「貴女は？」

と訊いて来たのだ。

彼は地球連邦の古代語を喋っていたが、千紗はその古代語で、喜んで答えた。

千紗と由梨亜は、中学校に入ってから選択授業で、古代語を習っていたのだ。

だから、簡単な会話なら、できるようになっていた。

「あたし、貴方の言っていることが解るわ！　あたしは彩音千紗^{さいいん}。十三歳よ。彼女は本条由梨亜^{ほんじょう}。十三歳」

「貴女は、彩音……千紗？　そちらは本条……由梨亜？　そして、

十三歳？　そして、何故――？」

その後、その人が喋った言葉は、まだ古代語を習って間もない二人にとって、少ししか意味の解らない物だった。

その二日後、二人がその病院らしき所で、図書室に行った。

そこには様々な本があったが、ほとんどが読めない物だった。

やはり、少しなら意味の解る本はあったが、まだ習っていない単語や文法が大量にあり、よく意味が解らなかったが、大抵の発行年は二千百年代頃だった。

そして、その中から、千紗がある物を発見した。

「ねえ、由梨亜。これって……」

呆然としたような千紗の口調に、由梨亜は首を傾げながら言った。
「どうしたの？」

由梨亜が駆け寄り、千紗の手に持っていた物を見た途端、啞然としてしまった。

何と、あの日記帳が千紗の手に載っているのだ。

「な、何、これ……一体、何がどうなっているの？」

由梨亜がそう言った途端、千紗の手の上にあった日記帳から眩しい銀色の光が溢れ、千紗と由梨亜は思わず目を瞑ってしまった。

そしてその光が去った後、看護師がやって来た。

「あら、ここにいたの？」

（えっ？）

二人はとても驚いた。

今までは何を言っているのか解らなかったのだが、今は何を言っているのか解るのだった。

「もうそろそろ検査の時間だから戻りなさい……って、二ホンゴは通じないんだった。エイゴも初歩的な物しか通じないし……えっと、私と」

と言い、右手の人差し指で自分を指すと、

「貴女達二人が」

と言い、左手の人差し指と中指で由梨亜と千紗を指し、

「一緒に行く」

と言つて、その三本の指をくつつけ、移動させた。

由梨亜と千紗は、

「分かりました」

と言つたが、相手が首を傾げたので地球連邦の古代語で言い直した。

すると、その看護師は、

「ほんと、何言っているんだか解らないわ。名前を言った言葉とか、こつちに話し掛けてくる時に喋っている言葉はエイゴだけど、名前はニホンジンっぽいし……でも、二人で話している言葉はニホンゴどころじゃなくって全然聞き覚えもないし、意味も解らないし……」
と、独り言を言った。

だが、千紗はその話の内容でもなく、先程の異常現象のことでもなく、別のことを考えていた。

（エイゴ……って、何？ ニホンゴ？ ニホンジン？ 意味解らないよ。でも、あたし達が話しかけられて少し解った言葉……あれは『エイゴ』だったのね。そして、彼女が話している言葉は『ニホンゴ』……）

そして、由梨亜と千紗は一緒に病室に向かった。

あの、交換日記帳を抱えたまま……。

検査が終わった後、二人はその交換日記帳を開いた。

自分達がこんな所に来た理由を知る為に。

その交換日記帳には、二人が書いた内容もなく、二人が期待したような内容もなかった。

しかし、実際書かれていた内容は、読まなければ良かったと思うほど、嫌な物だった。

《我ハ コノノートニ 閉ジ込メラレシ者ナリ

面白半分ニ フザケタ願イヲスル者ニ 禍アレ 呪アレ

真剣ナ思イヲ 抱エシ者ガ コノノートヲ手ニスル時ニハ 祝福ヲ

我ハ 知ッテイル

コレヲ手ニシ 我ガ祝福ヲ与エル存在ト ソノ者ガ望ムコトヲ

故ニ 我ハ一時的ナ物ナレド ソレヲ授ケヨウ

差別ノナイ 世界ヲ

ソシテ》

そこで、交換日記帳の文章は、途切れていた。
と言うより、恐ろしいことに、血に汚れて見えなくなっていた。
そしてページをめくると、そこには、ぽつりと、まるで切望する
かのように続きがあった。

《我ハ……望ム

其方達ノ 真ノ幸セヲ

我ハ コノノートニ 吸収サレタ生命

ナレド 未ダ消滅シテオラヌ 生命ナリ

ソノ生命ガ 消工失セルヨウナ危険ヲ 冒ソウトモ 我ハ 其方

達ヲ護ロウ

永遠ニ——永久ニ》

ここは……恐らく、北の方なのか、山に近いのか——もしかした

らその両方なのかも知れないが、あと三、四日後にようやく十月なのに、窓からは、紅葉した落葉樹が見える。

その樹を見るときもなしに眺めながら、二人は考え込んでいた。

このノートに書かれていた内容を。

その一週間後、由梨亜と千紗がこの時代……つまり、千年前の時代に来た衝撃でできた打ち身、痣、捻挫、打撲などの怪我が治ると、修道院兼孤児院の、『香封畏院^{かほういん}』に入れられた。

この時代では、小学校を卒業する十二歳で、小成人式と言う物を受ける。

それは、小学校を卒業して、中学校に入学してもやっていけるかどうかをテストする物で、その段階は、特級から八級と分かれ、その段階によって扱いが違う。

例えば、特級ならばどの学校にも入れるが、その下に行くに連れて、学校の選択肢がどんどん減っていくのだ。

つまり、下に行けば行くほど将来や進路の選択の幅が狭められてしまうという制度である。

なので、産まれ持った身分は、社会では

「フン、そんな何になるのさ」

と、粗雑に扱われるが、逆に有名な学校を卒業すると、

「ああ、あの学校の卒業生ね！」

と、随分大事に扱われ、場合によっては、様々なことに掛かる料金が優遇される場合もある。

また、会社などの就職も、かなり有利になる。

また、あまり有名でない学校の場合は、差別も何もない。

なので、学力でそこにいったという人だけではなく、もっと上に行けるような学力を持った人——そう、随分優遇されるような学校に行ける人でも、その特別扱いが嫌だと言って、わざとレベルの低

い学校に入る人もいた。

そして、そういう学校にも入れなかった人達は、優秀な学校に行けた人とは完璧に逆の扱いになる。

なので、身分による差別はないものの学力や学歴による差別があり、賢い人物が頭の悪い——賢い人に言わせれば、愚者に対する軽蔑の思いは、千年後の時代で、身分の高い人物が身分の低い人物に対して抱える軽蔑の思いと比べると、圧倒的にこちらの方がとても強いのだ。

由梨亜と千紗の場合は、この言葉が一切解らず（と思われる）で、喋れないので（これは本当）、この小成人式は受けられない。そして、この小成人式を受けられなければ、本当の成人式を受けることができない。

なので、大人になっても就職できない。

だから、このような修道院で、一生働いて生涯を終えることだろうと、思われていた。

さて、香封畏院に入った由梨亜と千紗だったが、意外と人数がいて、百人ほどの規模の修道院だった。

だが……その修道院の過ごし方が、あまりにも過酷で、激しく辛い物なのだ。

何と、平日は睡眠時間が五時間ほどしかない、かなりのハードスケジュールだ。

だが、休日は自由時間があり、睡眠時間が六時間摂れ、しかも、自由時間に昼寝もできる予定だった。

そんな所で、二人は過ごし始めた。

そのおよそ二ヶ月後、驚くべきことが持ち上がるとも知らずに……。

第四章「仲違いと、そして——真実」——1

「さあ、皆さん。働きなさい。吾らの守護者に視られても、恥ずかしくないように！」

朝の祈祷がそういう言葉で締めくくられると、みんな一斉に席を立った。

何があるのかと言うと、だいたい二週間後の十一月十八日はこの宗教が興った記念日で、その日の一日前から三日間、この香封畏院かほういんでは、封香奏祭ほうじょうそうさいというお祭りがあるのだ。

ちなみに、香啓畏院かけいいんと言う、男子専用の修道院の方は、啓香奏祭けいこうそうさいと言うお祭りとなる。

何ともファンタジーで、夢見がちで嘘にしか聞こえないが、何でも昔、この宗教の創始者が、悪人の集団を捕まえ、こらしめたそう

だ。
その悪人達は、こらしめられて改心し、二度と他人に悪さをしないと誓い、その印としてその悪人の頭の一族に代々伝わる珠、『香封珠こうふうじゆ』と『香啓珠かけいじゆ』を、創始者に渡した。

二度と、自分のような者に悪用されないように。

それは実に不可思議な珠で、香啓珠を持った者が念じれば様々な天変地異が起こせる、不思議な、そして恐ろしい珠なのだそうだ。

……どうせ、嘘だろうけれど。

また、香封珠を持った者が念じれば、逆に様々な天変地異を抑えることもできるそうだ。

……本っ当に信じられないと言うか、絶対確実に眉唾物だろう言い伝えだ。

そして、その創始者は、この雌雄の香封珠・香啓珠を、その悪人の望み通り、再び悪用されないよう呪術を施した箱に入れ、それを十重に囲み、普段は絶対にその箱を開くことはできなくしたらしい。たった一日を除いて。

この日、十一月十八日は、創始者がこの雌雄の珠を封じた日。

そしてこの日、創始者のような呪力を持つていない者、呪法をか
けられない者でも、それなりの人数が集まり、強い祈りを捧げれば、
それによって、箱は開くことになっている……らしい。

そして、香封畏院の最高巫女が、祈りが終わると前まで歩き、そ
の箱を一つずつ開いて珠を取り出し、厳かに、一年にたった一つの
願いを唱え、信者達がそれを唱和する。

そして香封珠（たった二つしかない為修道院も二つしかなく、女
子の方に香封珠、男子の方に香啓珠が納められている）に祈りを捧
げ、箱に戻しまた一年間の封印をする。

また、それとは別にその創始者を称える為の祭りでもある。

そしてそれが行われる間、近くに住んでいる信者でない人達も来
て、祭りを楽しむ。

信者でない人が来ても、それはこの宗教、香封啓教（こうふうけいぎょう）の宣伝になる
ので、喜んで迎え入れている。

だからこそ一ヶ月前から掃除や準備に様々な時間を取られ、平日
も休日も区別が全くない。

その為、一ヶ月前からは修道院に入っていない一般の信者達は礼
拝には来ず、個人や学校などで、宗教の勉強に来る人もいない。

そして、何と睡眠時間がたった四時間である。

本当に身体が保たない。

だから、休憩時間に椅子に座り込んで仮眠を取り、休憩終わりの
鐘が鳴ると同時に目を覚まして掃除を再開するのだった。

勿論、それは十代から五十代の、掃除をする女性達もだった。

そしてもし鐘が鳴っても起きなかったら、夜に祈禱書を写さなけ
ればいけないのだ。

それは、とても大変な作業で、何より睡眠時間がなくなる。

だから、由梨亜も千紗も必死で起きて仕事をしていた。

本当は言葉の通じぬ異邦人に祈禱書を写させる訳がないのだが、二人はそんなことは想像できなかったし、その気力もなかった。

そして、一週間前になれば大分楽になった。

今まで、普通の日……封香奏祭の一ヶ月以上前でも睡眠時間は五、六時間だったのに、一週間前になると何と七時間睡眠になるのだった。

それは、ここしばらく寝足りなかった由梨亜と千紗にとっては、まさに天国のようだった。

まあ、油断して寝坊し過ぎるのも罰則が待ち構えていたけれど。そして、三日前になると、また予定が変わった。

勿論、前日は封香奏祭の準備に明け暮れるけれど。

「ねえ……由梨亜。お願いだから、教えてよ。あたし、そういう風に悲しそうな由梨亜の姿、もうこれ以上見たくない。あたし達、今まで隠し事なんかしなかったじゃん。それは、あたし達が出会った五年生の時から、ずっと、ずっとそうだったでしょ？ ……ねえ、何で？ 何でよ、由梨亜。お願いだから、意地張らないでさ……ねえ、由梨亜」

封香奏祭の五日ほど前、千紗は悲しげに、嘆願するように、そして、半分諦めたかのように、今夜も同じ問いを口に出した。

由梨亜の答えも、毎回同じで、

「千紗、ごめんね。今は言えないけど、封香奏祭の日に分かるから……。だから、今は……。おやすみ、千紗」

「……おやすみ、由梨亜」

そして、二人の会話は途絶えてしまった。

今、この時代で言葉が解り合えるのは、お互いしか、いないというのに……。

やはり今夜も同じ答えが返って来た千紗は、ひどく哀しく苦しい気持ちを感じていた。

（どうして？ 何で由梨亜はあんな風になってしまったの？ 封香奏祭が近づいてから、落ち込んで、塞ぎ込んで、あたしも話さなくなつて……一体、何が原因なの？ それが分かれば、あたしは全力でそれを阻止、排除するのに……！ なのに、由梨亜は何も言わなくて……何で！ 何で由梨亜はあたしに何も話してくれないの？ もう……訳分かんないよ！）

そして、また、今夜も同じことを思い、器用なことに、怒りを感じながら眠りについた。

千紗は布団に入ってから眠りにつくのが速く、今日も僅か一分ほどで眠った。

その数分後、由梨亜は二段ベッドの上の段にある自分のベッドから降り、すぐ下の段で寝ている、千紗の顔を覗き込んだ。

そして、呟いた。

「千紗……ごめんなさい。私は貴女のこんな顔が見たくて、ここに来た訳でも、留まつてる訳でもないのに……でも、もうそろそろしたら、貴女は戻るから……だから、その時まで……ごめんなさい。本当に、ごめんなさい、千紗。あと、もう少しだから……」

そう言つと、由梨亜は目尻に垂れてきた涙を拭い自分のベッドに上つて行つた。

一体、ここで何が起こるといふのだろうか？

そして、二人は元の世の中に戻れるのだろうか？

今の時点では、まだ誰にも分からないが、ただ、一つだけ言えることがある。

それは、この時代に、時を超えて来たその理由、そしてそこで何が起こるのが、封香奏祭で、もしくはその後で分かるということだ。

そして……二人はどうなるのかと、いうことも。

早朝の空気の中に、香封畏院の鐘が鳴った。

今日は、封香奏祭第一日目。

当日になったら、少しはゆつくりできるかなあ……などと千紗は考えていたのだが、それは大間違いだった。

何故なら、今日までみんなで作ったタオルやぬいぐるみ、クッション、枕カバーなどの手芸品を大聖堂で売るのが、またその量が半端でなく多い。

それと比例するように、売り子の人数も多い。

そして、簡単な手作りお菓子や、搾りたてのジュースを有料で出すのでキッチン担当もいて、更に給仕係もいるので、それぞれ交代してやっていた。

勿論、由梨亜と千紗は常にキッチンでお菓子及びジュース作り担当か、休憩だったが。

けれども、それでも由梨亜は何も喋ろうとはせず、黙々と手を動かし、休憩時間も千紗のことを意図的に避けているようだった。

そして午前中が過ぎ、夕方になり、日が暮れると、封香奏祭に来た人々は、それぞれ客室に戻ったり、家に帰ったりして行った。

そして、その後小聖堂で祈禱を行った。

いつもは鐘と同時に祈りを捧げ始め、鐘と同時に終え、香封畏院の最高巫女……処女で最年長の女性から一言二言戴いてから部屋に戻って行くのだが、今日は祈禱の最後に、最高巫女が長々と話し始めた。

この香封畏院の最高巫女は、御歳八十七歳となるが、肌には艶があり、背筋も伸び、どんなに高齢でも精々七十代ぐらいだろうと思われるほど若々しい方だ。

「皆の者、今日のお勤め、ご苦労であった。明日は、中聖堂にて、祈禱を、街の信者達と、合同で行う。明日の、八時から九時頃に。全て、善きように。皆の者」

その声は、外見の若々しさから見るととても深く、落ち着いた声で、そこに立って、話しているだけで、威厳が辺りに満ち溢れていた。

「全て、善きように。最高巫女様」

皆で唱和した後、この香封畏院で、処女で二番目に年長の御歳七十九歳の副巫女が言った。

「皆の者、今年の願い事は、決まった。今年は、昨年出た意見、皆でアンケートを採った結果、一番多かった意見、『地球の森林保護、二酸化炭素削減が、これまでに以上進むよう』という物に決まった。休みなさい。全て、善きように。皆の者」

「お休みなさいませ。全て、善きように。最高巫女様、副巫女様」そして、みんなで席を立ち、部屋へと戻って行った。

（森林保護？ 二酸化炭素削減？ この頃、まだそんなこと言っていたの？ 一番酷かったのって、確か地球暦二千年代初め頃だったはず……あつ、思い出した。確か、この頃ってそれまで使われてた化石燃料っていうのが、もうほとんど使われなくなってきた、この時で言う、新エネルギー、エコなエネルギーって奴が一般的になってきた頃だっけ……だから、まだ地球温暖化問題があつて……その時には、今あたし達がいる時代には、人間は生きているかどうかよく分からないって考え方が一般的だったんだよね……そう言えば、あともうしばらくしたら、地球は初めて他星の存在を知って、しかもこっちの方が大分技術が後れていることを思い知らされて、大パニックに陥るんだよね……）

そう思い、布団に入りながら考え事をしていた千紗は苛立ったように寝返りを打った。

（ああ、駄目。今まで布団に入ってから考え事なんてしてなかったから、分かんなかったや。寝る直前に難しいこと考えると、眠れなくなるんだ……やばい。本気で寝れないかも……）

そう思っていた千紗は、上で起き上がるような気配がして、不思議に思った。

そして降りてきた由梨亜に、千紗は驚きながら声を掛けた。

「由梨亜。何やってるの？ 今はもう十一時過ぎたんだよ？ それに、早く寝ないと、明日身体が保たないよ」

千紗の不思議そうな言葉に由梨亜はギクツとして固まり、ギクシヤクと千紗を振り返った。

「ち、千紗……び、びっくりさせないでよ。っていうか、それが久しぶりに言葉を交わす相手に対する言葉？」

「そりゃあ、由梨亜とはこの頃何も喋ってないけどさ……。でも、あたしが声を掛けられないような雰囲気を出してたのは、由梨亜じゃん。おまけにあたしのこと意図的に避けまくってさ……。あたしはずっと、由梨亜と普通の会話がしたかったよ。だって、ここに入つて、封香奏祭が近づいてから、まともな会話なんて、誰とも、一度もしなかったじゃん。あたしは……ずっと、淋しかったんだよ。周りの人とは、古代語じゃないと喋れないし……。あたしは古代語、まだ習いたてだから詳しい会話なんてできないし、元々そんな重要な科目でもなかったし……。由梨亜としか、普通の会話はできないんだよ？ なのに……。なのに、ずっと避け続けられて……。あたし、本当に淋しかったんだからね。由梨亜は、本当に、何とも思わなかったの？」

「私は……」

と、由梨亜は目を泳がせ、言葉を濁らせた。

「だから、そう誤魔化さないで。分かってる？ 由梨亜。そうやって全部曖昧にするのは、貴族階級がいつもやっていることも知れないけどさ。あたしとの間ではやめて。そう誤魔化すぐらいなら、最初から何にも言わない方がマシだよ、由梨亜」

千紗にピシヤリと言い放たれ、由梨亜は

「……ごめん。本当に、ごめんね。千紗」と謝った。

「それにさ、由梨亜、封香奏祭の日にわかるって言ったよね？ 今日、封香奏祭一日目だけど、何もなかったよね？」

「三日目に分かるわ。お願いだから……待つて。そうすれば全部教えるから。まあ、私もこの前知ったばかりだからちゃんと伝えられるかどうかはいまいち不安だけど……でも待つて。全部分かるから私達が、この千年前の世界に時を越えてまで来た理由。何でこうなったのかも、全部。その後、千紗は元の時代に帰れると思うから、心配しないで」

由梨亜は、自覚症状もなしにうつかり失言をしてしまったが、それを大人しく見過ごす可愛い千紗ではなかった。

そういうことは、厳しく問い詰めるのが千紗流である。

「……『は』？」

「えっ？」

「今由梨亜、『千紗は』って言ったよね。由梨亜は元の時代に、帰れないって言うの？」

由梨亜は、思わず手で口を覆ってしまった。

失言してしまったと思ってるのは、まず間違はなく確かだ。

千紗は、幼い頃から本条家の跡継ぎとして鍛えられてきた由梨亜が、思わずたじろぐぐらいの据わった目をして、はつきりと言いつつた。

「あたしは嫌。あたしだけ帰って由梨亜がこの時代に残るって言うのなら、あたしも残る。あたし、由梨亜の居ない時代に帰ったって全然意味ないもん。あいつが……並樹咲なみきさき（中流の貴族）が、前の学校で騒ぎ起こしたからうちの学校に……私立小学校から普通の公立小学校に来て、あたしが咲に意見したからってあいつにいじめられて……・友達いなくなっちゃったあたしにとって、由梨亜しか友達がいないんだから。だから……お願い、由梨亜」

「……大丈夫よ。千紗。私は、この時代に何か、残らないから」

「……本当？」

「ええ。私は絶対に、必ず現代に戻るから。この時代で、一生を終わらせなんかない」

「そっか……。そう言えば由梨亜。何しようとしてたの？」

「ああ。あのね、千紗の寝顔、見ようと思って」

「はあ？」

千紗はあまりにも予想外の言葉に拍子抜けして、間抜けな声思わず口を付いていた。

「毎晩見てるんだあ、実は。それから寝てるの。千紗って、眠りにつくの光速並みに速いしね。今日は寝てなくて驚いたよ」

「へ、へえ」

かなり久し振りに和やかな雰囲気になった二人に、突然鋭い声が掛けられた。

「ちよつとあんた達。何やってんの？ 煩くて煩くて眠れやしない。せつかくの睡眠時間なのにそれをさらに短くされたら堪えないわよ……ってあんた達か。全く、言葉が通じないってほんと不便ねえ。えつと……エイゴで言うのメンドイからジェスチャーでいっか」

そう言ったのは、同室の十代の少女だった。

「あんた達」

と言って、由梨亜と千紗を指し、

「ベッドに戻って」

と言って二段ベッドを指した。

二人は頷き、大人しく布団に入った。

（一体……何なのかな。でも、由梨亜は封香奏祭最終日に教えてくれるって言うってたし。だったら、色々考えないで、さっさと寝ちやおう）

そして、すぐに眠りに落ちたのだった。

何とも暢気なことだが、これが、千紗が千紗たる所以である。

第四章「仲違いと、そして——真実」——2

そして、封香奏祭^{ほうこうそうさい}一日目が終わり、二日目が過ぎた。

二日目にやった内容は、一日目とほとんど同じだ。

千紗^{ちさ}は、由梨亜^{ゆりあ}と約束した通り、由梨亜が落ち込んでいた理由や、隠していることなどについては触れず、笑顔で、今まで通りに由梨亜と接していた。

千紗は後からこのことを振り返った時、もっと早くに由梨亜と言いつけて仲直りしておけば良かったと思ったが、この時は、ただ、単純に、由梨亜と仲直りできて嬉しいと思っていた。

三日目は、それまでやっていた、普通のお祭りのようなことは一切やらず……と言うより、信者以外立ち入り禁止とし、一日中祈祷となった。

朝早く、それまでバザーで使われていた大聖堂の片付けをし、片付け終わった頃、客室から信者達も集まって来た。

そして、みんなで大聖堂の長椅子に腰掛けた。

六百人収容できる大きな聖堂であるにも拘らず、その実に半分以上もの席が埋まっている。

そして、周りの人達は、呪言を唱え始めた。

それは、こちらの言葉を理解できるようになっていた由梨亜と千紗にも、全く解らない異国の言葉、もしくは呪文だった。

だが、声の響きは、親が子を慈しむような、慈愛の想いに満ち溢れていて、聴いているだけで心も身体も温かくなった。

そして、その呪言がしばらく続いた後、神器と呼ばれる、処女で三番目に年長の女性が就く物で、その名の通り、神託のような物を得る時の祈祷を行った時、降臨して来た創始者の寄坐となる、御歳七十三歳となる女性が、最高巫女と副巫女と共に入ってきた。

最高巫女の両手には、二十センチ四方の箱が捧げ持たれている。その中に入っている物は、あの『香封珠^{かうほうしゅ}』だ。

「皆の者、祈りをやめ給えよ」

最高巫女の、八十七歳とは思えない豊かで深みのある、大きな声が大聖堂に響き渡った。

「これは、初めて見る者もいよう。これは、この宗教、香封啓教創始者、ながてみよし長手深芳様から賜った神聖なる珠、他院に納められている、『香啓珠』と雌雄の珠である、『香封珠』である。今年もまた、様々なことがあった。そして、今年は昨年出た意見、『香封珠に願い得る神聖なること、皆の想いを取り入れ給えよ』、と言う物を受け入れ、この香封畏院かほういいんにいる者達から、何を願えばよいかを訊き、そして、最も多かった物にした。皆の者、心して、聞け」

そう言つと、最高巫女は一息つき、その『願い』を口にした。

「昨年の物と似ておるが、違つ物である。その願いを、皆の前で発表しよう。」

『この美しき星…… 地球。吾等はこの星以外に棲む所はあらず。しかしこの地球、吾らが棲むには適さぬ環境になりつつある。もし棲むのに適さなくなったのであれば、吾々は死に絶え、この星には死のみが立ち込めるであらう。今は改善に向かつて来ておるが、それでも、まだ良くなつてはならず。それどころか、また、悪くならないとも限らぬ。吾らはそうならぬ為に、願う。森林がこれ以上減らず、それどころか増えるように。それに伴い二酸化炭素急増を抑え、減るように。この願いが叶えられれば、長手深芳様、貴女様は敬われ続けることと成るであらう。そして、深芳様を守護された神々、精霊達も敬われ続けることと成るであらう。故に、吾らは願う。吾らの未来を願う想いを、どうか、叶え給えよ』

「吾等の未来を願う想いを、どうか、叶え給えよ」

「香封啓教創始者、貴き力をお持ちになる長手深芳様よ、吾らの願いを叶え得る力を持つ香封珠よ」

最高巫女が願いを口にし終えると、今度は副巫女が祈りを捧げる役目に就き、それを信者達が何度も何度も復唱した。

「香封啓教創始者、貴き力をお持ちになる長手深芳様よ、吾らの願

いを叶え得る力を持つ香封珠よ」

「香封啓教創始者、貴き力をお持ちになる長手深芳様よ、吾らの願いを叶えうる力を持つ香封珠よ」

みんなが、長手深芳と香封珠に対して祈りを捧げている間、最高巫女は香封珠の入っている箱に手をかざし、口を僅かに動かし、無心に祈っていた。

すると、普段は（実際にやったことはないが）叩いても落としてもうんともすんとも言わないはずの箱の鍵がカチリと開き、蓋が開いた。

すると最高巫女はそこから出て来た箱を取り出し、同じことを繰り返していった。

その間ずっと神器は床に跪き、最高巫女同様、口を僅かに動かし、無心に祈り続けていた。

そして、最終的に香封珠が最高巫女の手によって取り出され、皆の視界に入るぐらい、高く高く掲げられた。

まるでそれが合図だったかのように、皆の祈りがふっとやんだ。

その途端に、神器の口から、女性の神々しい声が大聖堂に響き渡り出した。

千紗は、千紗と同じ時代に生きる大多数の人間と同じように無神論者であり、科学的な根拠が何もない物を全然信じず宗教なんかとんでもないと思う人間だったが、この声を聞いた途端、神を信じなくても、少しは超常現象を信じてもいいかと思ってしまうた。

それほどまでに、神器の声は普段の声とは全然違う、神々しい声に変わっていたのだった。

『その願い、叶えよう。皆の言うこと、この妾が承知した。近いうちに、その願い叶うであろう。しかし、努力を怠ってはならぬ。妾が願いを叶えるのではなく、妾が其方らを手伝うのである。このこと、しかと申し付けたぞよ』

神器は言葉を紡ぎ終わると、首がガクツと垂れ、意識が戻った。すると、最高巫女が話し始めた。

「皆の者、これにて今年の祈りの儀を終える。長手深芳様の仰せらるること、しかと心に留めよ。夕刻、香封珠の封印の儀を行う。それまで休むように。全て、善きように。皆の者」

「はい、今年も長手深芳様の御加護を。全て、善きように。最高巫女様、副巫女様、神器様」

そして、人々は大聖堂を後にした。

今日は、封香奏祭最後の日で、また、長手深芳が香封珠・香啓珠を封印した日でもある。

つまり、普通の人にとっては一日目、二日目がお祭りで、三日目は『なにやら得体の知れない、信者しか参加できないお祭り』と認識している。

しかし、信者達にとっては一日目、二日目が前夜祭であって、三日目こそが本祭りなのだ。

そして、この日は最も清い日である為断食をする。

しかし……千紗のようによく動き回り、まさに『子供はよく食べよく眠る』の見本のような成長期の少女達には、かなり辛いのだ。た。

千紗は、グウグウ鳴るお腹を抱え、ベッドに横たわっていた。

理由は勿論、『動くとお腹が空く』からだ。

その時には、部屋には千紗以外誰も居なかった。

他の八人の少女達のうち、真面目で将来ここに残りそうな五人が小聖堂にお祈りに、他の一人が食堂に忍び込みに行き、そこに巫女や規則に厳しい老女達が行かないようにあとの二人が見張りをしていた。

そして由梨亜は、千紗が気付いたら既に居なかった。

最初はトイレにでも行っているのだろうと思っていたが、さすがに一時間もトイレに入っている訳がなく、どこにいるのか全く分か

らない状態だった。

そこに、コンコンと扉が叩かれた。

千紗は起き上がることにさえ億劫だったので、寝たまま

「誰……？ 鍵は開いてるわよ」

と、扉の外の相手に、意味が通じないことを承知で問い掛けた。すると、驚いたことに扉が開き、そこには由梨亜が立っていた。

「由梨亜……？ どうしたの？」

「千紗、ちよつと来てくれる？」

由梨亜の顔は強張り、少し蒼褪めているようだった。

「由梨亜、どうしたの？ 顔色悪いよ。少し寝たら？」

「いいえ。それどころじゃないの。私は、やらなくちゃいけないの。千紗、私達がこの世界に来た理由を話すわ。だから……来て」

「えっ？ でも、ここで話してもいいんじゃないあ……」

「いいえ。ここで話すと、迷惑が掛かるもの。それに、誰がいつ来るか分からないし……」

「そう……。じゃあ行くよ。本当は、お腹空いて、あんまり動きたくないんだけどね」

千紗がそう答えると、由梨亜はちよつと笑い、

「そういう所が、千紗らしいわ。私……そういう千紗が、好きよ」

「由梨亜……？」

千紗は、訝しげに答えた。

今まで、『千紗らしい』と言われたことはあっても、『そういう千紗が好き』とは、一度も言われたことがなかったからだ。

そして、由梨亜は理由を話すだけではなく、何かを起こすとも……直感的に分かった。

そして、由梨亜は

「こつちよ」

と言い、千紗の手を取り、小走りで進み始めた。

第四章「仲違いと、そして——真実」——3（前書き）

警告

今回、あまり直接的ではありませんが、近親相姦の表現があります。またこれ以降の話では、普通に近親相姦が行われ、兄妹で夫婦、または恋人になっているという表現も出て来ます。他にも、一夫多妻制や後宮などのハレム的な要素も出て来るので、そういう表現を生理的に受け付けられないという方は、これ以降の話は読まないで下さい。この前文で気分を悪くされた方がいらっしやいましたら、申し訳ございません。

第四章「仲違いと、そして——真実」——3

由梨亜は千紗の手を握り、スタスタと歩いて行った。

千紗はどこに行くか分からなかったが、由梨亜の緊張した雰囲気
に圧され、訊けなかった。

そしてしばらく歩き続けると、由梨亜がどこに向かって歩いてい
るのか分かってきた。

何故なら、その道はここ一ヶ月ほどずっと通い続けた道……客室
のある棟へと向かう道を通っていたのだから。

（一体、何が起きているというの……？ それに、あたしと由梨亜はど
うなるの……？）

と、千紗は考え続けていた。

やがて、客室の中の使われなかった部屋の一つに着いた。

由梨亜は扉を静かに開け、閉める時もできるだけ音を立てないよ
うに気をつけていた。

そんな由梨亜の様子にただならぬ物を感じ、千紗は由梨亜を見つ
めた。

千紗は、掠れた声で話し掛けた。

「由梨亜……とうとう、教えてくれるんだね……」

「ええ……そう。私は……」

そこまで言うと、由梨亜は一息つき、真っ直ぐに千紗を見つめた。

「千紗、落ち着いて聞いて欲しいの。そして、全て信じて欲しい……」

……

「……うん。分かった」

千紗は、由梨亜の真剣な表情を見て、決心した。

由梨亜は、このような様子で冗談が言える人ではない。

だから、これから話すことが真実であると千紗は知っていたし、
直感でも感じていた。

由梨亜は、それでもしばらく躊躇した後、思い切って、千紗に告

げた。

「……私は……私は、この星の……地球連邦の人じゃないわ」

千紗は、あまりのことに頭が真っ白になってしまった。

覚悟はしていたけれど、そこまでの物とは思ひもしなかった。

「由梨、亜……？　じよ、冗談じゃ……」

「勿論、冗談じゃないわ。私がそんな冗談、言える訳ないわよ。まあ、私もこっちの時代に来て、初めて知ったんだけど……」

「で、でも……由梨亜のお父さんとお母さんは？　どうなの？」

「いいえ。違うわ。あの人達は、実の親ではないわ。血が繋がらない……育ての親」

「でも、子供が産まれた記録は残ってるじゃん。それは？　そんなの、偽造しようがないよ」

千紗は必死で食い下がった。

「ええ、身分の高い人達の出生記録を作るのはそういう記憶があっても無理。けど身分の低い人なら遅れても大丈夫でしょう？　理由だって、名前を決めるのに時間が掛かったと、母体が弱かった為産まれるまでは油断が許されない状態だったと言えば済むことだしね」

千紗は『身分の高い』という所に引かかったが、由梨亜の言う身分が高いというのは王族などだと思い直し、それを横に置いて言い返すことにした。

「でも……そんな、人の記憶って換えることなんてできる訳ないじゃない。そんなお話の世界だけでしょう？　そんな都合良くできたら、世の中何も苦労はないよ」

「いいえ。一つだけ方法はあるわ。……千紗、『魔法』って、信じる？」

「魔法？　まさか、これっ……！」

由梨亜は、これまでの記憶を辿るかのように遠い目をした。

「私達が産まれた家を変ったのも、それに伴って周りの人の記憶もそれに沿って変わったのも、出生記録が変わったのもここに来たのも、香封珠（カハツツブ）に願いを叶えさせたのも、全て魔法。それに、宇宙連

盟——この全宇宙の平和と共存を維持する団体の、事実上の長たる役割を持つ国、花鶯国かおうこくが特許を持っている物は、魔法を使っているわよ。特に、過去を見る去解鏡きよかしょうは、科学技術なんかじゃできない代物よ。魔法じゃないとあり得ないわ」

由梨亜は重大なことをサラツと言った為、千紗はそのことに気付くのに時間が掛かった。

だが、数秒後、気付いた千紗は、思わず唾を飲み込んだ。

「由梨亜……そんな、まさか、あたし達って……」

「そうよ。貴女の名前は本条千紗ほんじょう。名前ぐらいなら、後で変えましてと言えはいいのだから、そういうことはどうとでも繕えるのよ。

そして、『彩音千紗さいいん』という人物は、本来なら、この世のどこにもいない(……)」

「どういう、こと……？ どういうこと、由梨亜？！」

思わず千紗は声を荒げた。

「千紗、静かに。つまり、こういうことよ。『他の居住可能惑星Aで産まれた赤ん坊Bが、地球連邦の本条家に産まれた赤ん坊Cに成り代わり、本条由梨亜となる。赤ん坊Cは子供に恵まれなかった夫婦Dに産まれた赤ん坊として、記憶を変えられ、彩音千紗となる。そして育ち、赤ん坊Bと赤ん坊Cは大きくなってから出会い、親友となり今ここにいる』」

由梨亜の真剣な表情と、感情の全く窺えない声音に、千紗は由梨亜が本当のことを言っているのだと、何故かすんと腑に落ちた。

「じゃあ、由梨亜は？ あたしが、本当はお父さんとお母さんの間に産まれた子供じゃなくて、由梨亜のお父さんとお母さんの間に産まれた子供だということは分かったし、信じる。だけど……だけど、由梨亜は？ 一体、誰なの？ 誰の子供に産まれたの？」

「そうね、何から話せばいいのかしら？ ……じゃあ、まず、私は誰なのかを話すね。私は……私は、宇宙連盟の長たる役割を担う花鶯国の王女、花雲恭富実樹かうんきよふうみきよ」

「花鶯国って、王族のみが日本州や中華州と同じ名前を漢字で表す

国で……確か……！」

千紗は、とんでもないことを思い出した。

そのことは、先生が、教職にある身とは思えないほど嫌悪感に満ちた顔で言っていたから、千紗の記憶に色濃く残っていた。

そして、だからこそ、由梨亜は地球連邦に來たのだと確信した。

「……そうよ。花鶯国の王族の苗字は『花雲恭』。そしてね、花鶯国の王……花雲恭家の長には、常に六人の妻がいるの。前王の娘で最も高い王位継承権を持つ王女がなる后。他国の王女がなる妃。貴族の中で最も身分が高い戦祝・政財・宗費大臣の誰かの娘や孫がなる妾。地封貴族と言う、土地を封じられている貴族の娘が官吏の娘がなる最貴。後宮に勤めている侍女がなる最侍。それなりの地位の一般庶民の娘がなる最女」

由梨亜はずらずらと後宮の女性達の官名を挙げた。

「私は王の娘だけど、妾の娘。だけど、誰の子であろうと女であるうと、最初に産まれれば第一王位継承者となるの。そして私が産まれてほんの二時間後、妃の娘である異母妹が産まれたわ。次の日には、後の息子である異母弟も。順番から言うとな私が王位を継ぐんだけど、二時間差の異母妹に変えるべきだと、妃や後見人の貴族が騒ぎ出してね。こっちの方が血筋は上だと。そっちはたかが妾の子ではないかと。そして、自分は妃だが元々他国の王族。この国の『因習』で自分は妃になったが、自分は王女だったと。外交関係上の問題となる前に、こっちに第一王位継承権を寄越せと」

由梨亜の顔は、どんどん険しくなる。

「しかも、彼女の性格は過激で、私はあの国にいたら消されていたでしょうね。第一、后と妾は何度も彼女に生命を狙われ、流産されかかったらしいわ。あと、他の弟妹達のことだけど……」

由梨亜はそこまで言うのと、一息をついて言った。

「私が産まれて八ヶ月後に最女の長女、十ヶ月後には最貴の長男、一年一ヶ月後に最侍の長男、一年五ヶ月後に後の長女、一年八ヶ月後に妃の長男、二年後に妾の次女、二年二ヶ月後に最女の長男、二

年六カ月後に最侍の長女、二年八ヶ月後に最貴の次男、二年十一ヶ月後に後の次女、三年一ヶ月後に妃の次女、三年四ヶ月後に妾の長男が産まれたの。だから上から行けば妾の長女、妃の長女、後の長男、最女の長女、最貴の長男、最侍の長男、後の長女、妃の長男、妾の次女、最女の長男、最侍の長女、最貴の次男、後の次女、妃の次女、妾の長男ね。さっき言った理由——あの人が妃になったせいで、私の本当の御父様と御母様は、私を地球連邦に送ったのよ。理由は他にもあるでしょうけどね」

由梨亜は、少し寂しげに言った。

千紗はと言うと、あまりに沢山のことを一度に言われたせいで、少し混乱気味だ。

由梨亜はベッドの上に置いてあった箱を取り上げ、歌うように、千紗には意味の解らない言葉を唱えながら、箱を開けていった。

そして、出てきた物を見て、千紗は息を吞んでしまった。

「それは……『香封珠』！」

「よく覚えてたわね、千紗。そういえば思ったんだけど、千紗は記憶力がいいのに勉強ができないって嘆いてるのは、勉強を頑張るってやる気が足りないんじゃない？」

「由梨亜！ また話逸らさないでっ！」

また、千紗は声を荒げた。

「あ……またやっちゃった」

「でさ、由梨亜。由梨亜はどうやってそのこと知ったの？ 由梨亜、こつちに来てから知ったってことは、あっちでは知らなかったってことでしょう？」

「うん。封香奏祭ふうかうそうさいの準備が始まってからの朝の祈禱の時間に、情景が浮かんで来たの。それは、あの花鶯国の様子だった。科学技術は地球連邦とは比べ物にならないくらい進んでいたのにも拘らず、自然が沢山あってとても美しい星だったわ。そして、最後に、私が産まれた時の様子、それで起こった争い、何故私が地球連邦に来たのか、そして、元いた時代に戻る方法が分かった。全部分かったのは、

封香奏祭の一週間前だったわ」

「一週間前って、丁度由梨亜があたしと話さなくなった時……」

「ええ、そう。ところで、戻る方法は、実は三つあるのよ」

「み、三つ……？」

千紗は、少し動揺してしまった。

何故なら、常識的に（？）考えて普通はあり得ない状況から戻る方法は、そんなに多くないと思ったからだ。

「一つ目は『富実樹と入れ替わった少女を生贄として奉げ、その生命力を使い花鶯国へ戻れ』」

「……あたし？ あたしを、生贄、に？ その……方法使えば、あたし、死ぬの？」

「ええ。生命力を使うということはその生命を全て使い切ることだからね。ちなみに、それが一番いい方法らしいわ。だけど、私は絶対嫌。生贄なんて時代錯誤なこと、誰がするもんですか。それに、誰かを殺して自分が幸せになるなんてことやりたくないし。特に、それが私の親友の千紗だなんて。そして二つ目は、『何か強力な力を持つ物を、入れ替わった少女を媒体として力を注ぎ込み、富実樹は花鶯国に戻れ。だが、媒体とされた少女はこの時代に残される。但し、媒体とされた衝撃に耐え切れず、寝たきりになってしまいう可能性が高い』」

「その方法使ったら、あたし、この時代に取り残されて、しかも一生寝たきりになるかも知れないの？！」

千紗は、驚き過ぎて、かなりの大声で叫んでしまっただけで口を押さえた。

「大声出さない。一応結界張ってるからあんまり洩れないけど、千紗は規格外よ。絶対に洩れるわ。で、話を戻すけど、私もこの二つの方法は使いたくない。千紗がこの時代に残るのは嫌だし、死ぬのも寝たきりになるのも嫌。だから、三つ目の方法を使いたいと思うの」

「三つ目の方法って……？」

千紗は、ほんの少しだけ期待を混ぜて言った。

その様子に、由梨亜は微笑して、言った。

「あのね、三つ目の方法は、『富実樹と入れ替わった少女の二人で力を合わせ、強力な力のある物の媒体になり、負担を半分にする。そして富実樹は花鶯国に戻り、入れ替わった少女は現代の地球連邦に戻り、本当に産まれた家に戻る。周りの記憶も、最初からその少女がその家に産まれたという物になり、出生届もそれに合わせて変わる。但しその入れ替わった少女は、最初は富実樹のことを憶えているが少しずつ忘れていき、最終的には富実樹を完全に忘れる。しかし富実樹は覚えている。また、互いを信頼していなければこの方法は使えない。この方法は、互いを信頼していれば最も成功率が高いが、逆の場合成功率は最も低い』」

「つまり、この方法は場合によって最も成功率が高く、最も成功率が低い方法ってことね」

「そう。……千紗、どうする？ 千紗が嫌なら、私はここに残るわ。私は、見たことがない御父様御母様よりも、千紗の方が大事なの」

「何言ってるの、由梨亜。そんなの認めないよ。由梨亜は花鶯国の王女で、第一王位継承者でしょ？ そんな由梨亜が戻らなかつたら、花鶯国のお父さんとお母さんがどんなに悲しむか分かる？ あたしは三つ目の方法を試すよ。由梨亜が戻れるのならどんなことでもやる。あたしは由梨亜を信じてるし、由梨亜もあたしを信じてるでしょ？ だから今のあたし達にとって三つ目の方法が、一番成功率が高いつてことだよ。もし失敗したとしても、由梨亜は戻れるように祈るよ」

「千紗……」

由梨亜は涙で声を詰まらせた。

「ありがとう。三つ目の方法をやってみよう。私は、絶対に千紗のこと忘れない」

千紗も、少しでも瞳を涙で潤ませながらも、精一杯の晴れやかな笑みを浮かべた。

「あたしはどう足掻いても由梨亜のことを忘れるけど、それでも覚えていれる最後の瞬間^{とき}はできる限り延ばす。約束するよ。あたしは由梨亜のことを忘れても、心の奥底に、由梨亜のことを……由梨亜と過ごした楽しい時間を刻み付けて、記憶じゃなくて感覚で、絶対に覚えてる」

「じゃあ、始めよつか」

「うん。由梨亜、絶対に、成功させようね」
「勿論」

千紗と由梨亜は、不敵に微笑んだ。

まるで、今の自分達には、不可能なことはいとも言うかのように。

まるで、自分達に残された最後の時間——『彩音千紗』と『本条由梨亜』として過ごせる、最後の瞬間^{とき}を、心に刻み付けるように。

二人は、最後の賭けに出た。

互いを想う気持ちのみで……。

第五章「時と宇宙（そら）を越えて……」――1

「由梨亜、まず、あたしはどうすればいい？」

千紗は、真剣な目をして由梨亜に問い掛けた。

「うん。まず、この香封珠（かふうしゆ）の力を引き出す為には、呪言が必要なの。それを言った後お願いをするんだけど、お願いの方を聴いて繰り返して」

「うん、分かった」

そう千紗が答えると、由梨亜は香封珠を両手で持ち、目を閉じて呪言を唱え始めた。

それは意味の解らない言葉で、千紗は少しボーっとしていたが、由梨亜が見詰めているのに気付き、その後と言った意味の解る言葉を必死で繰り返した。

「『富実樹（ふみき）の父である花雲恭峯慶（かうんきやうほうけい）、母である花雲恭由梨亜、富実樹を花鶯国（かおうこく）へ、千紗を現在の日本州へと戻らせて下さい』」

「『富実樹の父である花雲恭峯慶、母である花雲恭由梨亜、富実樹を花鶯国へ、千紗を現在の日本州へと戻らせて下さい』」

「『その証として、わたくし達の友情の徴を、ここに示します』」

「『その証として、わたくし達の友情の徴を、ここに示します』……
…つえ？」

「あれ？ どうした？ 千紗」

「シルシって？ 何？」

「ああ、それは今から言うわ。……『その徴として、わたくし達の血を捧げます』」

「『その徴として、わたくし達の血を捧げます』……うつ、血なの？」

「ええ。『この力ある物、「香封珠」に血を捧げるので、わたくし達にその御力を御貸し下さい』」

「『この力ある物、「香封珠」に血を捧げるので、わたくし達にそ

の御力を御貸し下さい』」

「それじゃあ、これで血を」

そう言って由梨亜は、どこで手に入れたのか、今となってはアンティークに等しいほど古い短剣を取り出した。

勿論、千紗は見るのも触るのも初めてである。

由梨亜は、自分の右手で短剣を抜き、左手の人差し指にその刃を当てた。

そして、血が出ている左手をそのままにして、右手で千紗に短剣を渡し、それを千紗は同じように指に当てた。

「……………っ！」

思わず、千紗は顔を顰めた。

たかが左手の人差し指から少し血が出ているだけなのだが、それでも痛いのだ。

しかも、今この世の中では包丁にも安全装置が付けられ、百パーセントに近い確率で指が切れなくなっている為、刃物で指が切れるのは本当に初体験だった。

そして、由梨亜はよく顔を少しも歪めないなど感心した。

由梨亜は千紗の手を取り、二人の左手を、人差し指が付くように合わせた。

そして、混ざって滴り落ちる血を香封珠に垂らした。

そうすると、香封珠は真っ赤なワインの色に輝き、滴り落ちる血を吸収した。

「あっ……………！」

と声を上げた由梨亜の回りを光が取り囲み、こちらの世界に来てから、ずっと解かれていた髪が、室内にも拘らず強く吹いている風に煽られ広がる。

そして、由梨亜の少し波打っていた髪が更に波打ち、フワフワと広がり、色は茶色から栗色へと変わり、その毛先が腰に届くぐらいの長さまで長く伸びた。

そして背が四センチほど伸び、顔立ちは変化し、由梨亜の面影は

少し残ったが、今までの由梨亜とは到底思えない外見となった。

そして、光の乱舞がやみ、由梨亜は……いや、『花雲恭富実樹』は目を開けた。

けれど、その目の色も、花鸞国王家の血筋特有の、桃色へと変貌を遂げていた。

そこに現れた女性を見ても、耀^{よう}太も、瑠璃^{るり}も、鈴南^{すずな}も、クラスメイト達も、部活の仲間達も、『由梨亜に似た女性』、『似ているけれど他人の空似』といった印象しか受けにくいぐらい、由梨亜は富実樹になった途端、印象が変わってしまった。

長く付き合ってきた千紗でも、ぱつと見には別人に見えるほどだった。

「ゆり、いいえ。貴女は……『富実樹』？」

「ええ、この姿の私は『富実樹』よ。そして千紗、貴女も産まれた時の本当の姿で育っていたのなら、その姿になっていたはずの姿に変えなくちゃね」

『富実樹』はそう言うのと、千紗に向かって、手をかざし掛けようとしたが、その途中で、奇々怪々な音を聞き、ピタッと手を止めた。

「ゆ、ふゆ、ふ、ふみ、ふ……」

それは、何とか富実樹のことを『富実樹』と呼ばうとして、どうしても『由梨亜』と呼んでしまいそうなのを何とか抑えようとしている千紗の声だった。

富実樹は呆れて、伸ばし掛けていた両手を腰に当てて言った。

「千紗、呼びにくいなら、何も無理に富実樹と呼ばなくていいわよ。由梨亜って呼んでいいわ」

それから、富実樹は千紗を眺めた。

「ここまで外見違うのに同じに思えるなんて、千紗って凄いわ。私、そんな自信ないし」

富実樹のその呆れたような言葉に、千紗は少し唇を尖らせて言った。

「だっ、だって外見は変わっても、声の抑揚、顔の表情は全然変わ

ってないし、由梨亜の面影がちゃんと残ってるんだよ？　これで別人だと思えなんて……しかも目の前で変わったのに……無理があり過ぎるよ。少なくとも、あたしはそうは思わない」

「だから、そこが凄いのよ。大抵の人は、見た目が変わったら別人だっと思うんだもの」

そう言つと、富実樹は千紗の左手を取り、自分の左手と共に香封珠にくつつけた。

そうすると、不思議なことに、流れていた血が止まり、傷跡も癒えていった。

そして、今度は千紗の身体を光が取り囲んだ。

その光がやむと、千紗は香封珠からゆっくりと手を離し、部屋に備え付けてある洗面台の方にゆっくりと歩いて行った。

そこに備え付けられている鏡を覗き込むと、そこには、千紗とよく似ているが、千紗ではない別人が映っている。

今まで見てきた、自分の顔とは似ている。

それは認めるが、でも、違う。

まず、髪の色が墨を流したような黒から薄茶色へと変わり、顔立ちも、耀太や瑠璃と似た少し彫の浅い、色白でほっそりとした小顔へと変わっていた。

だが、よく見知った人物が見れば、

「髪染めた？」

「お化粧した？」

「プチ整形した？」

などと訊かれるほどしか変わっていなかった。

「由梨亜、これって……」

千紗がそう呟くと、いつの間にか斜め後ろから鏡を見つめていた富実樹が、自分の姿を苦笑しながら眺め、こう答えた。

「ええ。それが、貴女の本当の姿なのよ、千紗。私がこれから先、この姿で暮らすように、貴女もその姿で暮らすことになるわ」

そう言つと、富実樹は

「千紗、続きを始めるわよ。私達は、これから『花雲恭富実樹』として、『本条千紗』として、行動しなければならぬから」

「うん、由梨亜」

二人は香封珠を取り上げ、二人の両手で包み込んだ。

すると、千紗の頭に富実樹の声が流れ込んだ。

『千紗、これから最後の呪言を唱えるから、それを合図が出てから口に出して唱えてね』

『うん。分かった』

『「今、其方の持つ力を解き放ち、我らを正しく元いた場所へと戻し給えよ」。覚えた？』

『うん。分かった。あたし、記憶力は本気になれば凄いんだもの。言えるわ！』

『じゃあ、いくよ。三、二、一！』

「『今、其方の持つ力を解き放ち、我らを正しくもといいた場所へと戻し給えよ』っ！」

二人がそう叫んだ瞬間、香封珠が今までになく、直視したら目が眩れてしまいかも知れないほど、金色と銀色が混じりあった色に輝き、千紗は思わず目を瞑ってしまった。

「千紗……」

富実樹の静かな声が聞こえ、千紗が目を開けると、そこはこの世界に来る時に通った、あの様々な色が氾濫しているトンネルだった。一つ違うのは、来る時は抗いようのない力で引つ張られていたはずが、今は浮くようにして富実樹と一緒に立っているということだ。そして、何にも引つ張られてなく、まるで無重力の中に立っているように、けれど、床の上に立っているように足元は安定していた。「何？ 由梨亜。そういうええさ、本条由梨亜と彩音千紗の時は、彩音千紗の方が身長高かったけどさ、花雲恭富実樹と本条千紗だったら、花雲恭富実樹の方が身長高いんだね」

「でも、千紗の身長は大して変わってないわよ。私が大きくなっただけ。っと、今度は千紗が話ずらしたわね。……ねえ、千紗。ここ

って何だと思う？」

「……？ 分からない。由梨亜は分かるんじゃないの？」

「いいえ、分からないわ。ただ、一つだけ分かることがあるとすれば、ここは亜空間だということだけね。私達が生きている通常空間でもなく、異質な異空間でもない……『亜空間』」

「由梨亜……」

「だからね、私、そういうことを知ろうと思うの。地球連邦では、とつくの昔に魔法は存在を否定され、迫害されて細々と消えて逝ったわ。私達がさっきまでいたあの時代……あそこの時代が、『魔法』と言う名称を使わなくても、そう言う『力』をまだ信じている人達のいた、最期の時代なのよ。あの何十年後かには、そういう魔法を信仰する宗教は全てなくなっている。貴族制の、王権制の、復活とともに。だけど……花鶯国にはまだ魔法が残っているの。だから、私はそれを学ぶつもりよ。私は今の所、それが夢なの」

「由梨亜……嬉しそう！ 良かったあ……最後に由梨亜のそんな顔を見られて」

千紗は、本当に……本当に嬉しそうに、微笑んで、言った。

「千紗……私も、最後に千紗が嬉しそうなの見れて、本当に良かった」

「でも、由梨亜……」

千紗は、先程とは対称的に、哀しそうに目を伏せて言った。

「これで、お別れなんだよね。もう……これから先、会えないかも知れないんだよね」

「大丈夫よ。私、王宮に閉じ籠るばかりの王族にはならないから。だからニユースで私のこと見れるかも知れないし、それに王族が各国を訪れるのも外交関係上あるでしょ？ まあ、それで何かに巻き込まれて死んでしまったとしても十四人も弟妹がいるんだもの。問題ないわ。まあ、私は地球連邦だけじゃなくて色々な国を訪れるつもりなんだけどね。そして地球連邦に行った時って、大抵有名な地方を訪ねるでしょ？ それなら地球連邦五大経済地方のその三の位

置にいる日本州を訪ねても不思議じゃないから、私が日本を訪れることもできるし、その時々会えるかも知れないじゃない！　だから、また会えるかも知れないよ！」

「……由梨亜。ありがとう。あと……あの、ね、由梨亜。これ」と、不意に千紗が話し始めた。

富実樹は少々困惑しながら訊き返した。

「何？　千紗」

「これ、あたしがこの前あげた誕生日プレゼント。前、ここ通って行ったでしょう？　で、その後病院で目覚めた時、あたし、これ握ってたの。返すタイミングが掴めなくて返せないでいたけど、これで最後だし……だから、これ、返すね」

千紗はそう言い、富実樹にそれを手渡した。

「千紗……ありがとう。本当に……本当に……！」

「あたしは由梨亜の姿をニュースとかで確認できるかも知れないけど、由梨亜はもっと難しいでしょ？　それに、あたしの方は次第に由梨亜のことを忘れて、由梨亜は永遠にあたしのことを憶えている……だから、これを見てあたしを思い出して」

千紗がそう言い終えた途端、二つの大きく輝く光が降り、二人を包んだ。

「時間切れなのね……千紗、私、千紗に逢えて本当に良かった……ありがとう！」

「それは、こっちの台詞だよ。由梨亜に逢えて本当に良かった。ありがとぅ、由梨亜！　花雲恭富実樹としてのこれからの人生を、精一杯生きてね！　……またね、由梨亜！」

「千紗も……千紗も、本条千紗としての人生、楽しく過ごしてよ！　絶対に！　またね、千紗！」

その言葉を口にし終えた途端あまりにも眩し過ぎる、爆発したかのような光に包み込まれ、何も見えなくなり、また、何もかも分からなくなった。

しかし、最後の最後まで二人の胸の内に抱えていた想いは一緒だ

った。

互いに、ありがとうと、出逢えて良かったと感謝する気持ちを抱えて……。

第五章「時と宇宙（そら）を越えて……」―2（前書き）

途中でいじめの表現があるので、苦手な方はご注意ください。

第五章「時と宇宙（そら）を越えて……」――2

千紗が気付くと、そこには見慣れない天蓋があった。

それ以前に、身体が柔らかな布団の上に横たわっていることに途惑いを感じた。

（一体……ここは、どこ……？ 確かあたし……千年前に、飛ばされて……色々あって……それで……。そうだ。香封畏院に入ったんだ。そして……由梨亜と話さなくなって……封香奏祭があつて……。それで、その、最後の日に……由梨亜はっ……！ 由梨亜が……本条由梨亜じゃなくて、花鷲国の王女様、花雲恭富実樹……であたしが、彩音千紗じゃなくて、本条、千紗で……！ そうだ。由梨亜……由梨亜はっ？）

ゆっくりと身体を起こし、由梨亜を捜して辺りを見渡すと、鈴南がシーツの上に頭を乗せて眠っていたのに目が留まった。

千紗は、少し焦った。

鈴南は本条家に仕えている召し使いだが、本条家は上流貴族の家柄。

たかが召し使いといえども、普通、庶民は本条家の人の目に届く所には雇わない。

庶民は、庭の手入れや召し使いの身の回りの世話をしたり、屋敷を掃除する機械を手入れしたり、台所仕事をしたりする、本当の端者なのだ。

本条家の令嬢に仕えるならば、最低でも下流貴族の娘なのである。なのに、人前で寝てしまうなんて……それも、自分の仕えている人の前で寝てしまうなんて、とっても恥ずかしいことだ。

少なくとも、自分の知っている限り、鈴南はそう考える人物である。

一瞬、千紗は鈴南を起こすことを躊躇ったが、思い切って起こすことにした。

「鈴南……起きてる？」

千紗がそう呼び掛けると、鈴南は一瞬ビクッと身体を震わせ起きた。

「お、お嬢様……お……お目覚めですか？　これは、申し訳ありませんでした」

鈴南はそう恐縮して謝った後、

「千紗様、少々お待ち下さいませ。今、旦那様、奥方様、侍医をお呼びして参ります」

鈴南はそう言うのと慌てて部屋を出て行った。

余程恥ずかしかったのだろうか、可哀想なことに、顔が真っ赤である。

千紗はその間に、鈴南に気を取られてあまり詳しく見なかった部屋を見渡した。

千紗は、自分の記憶の中にある由梨亜の部屋の記憶とこの部屋を照らし合わせたが、やはり、これは由梨亜の寝室だ。

今の千紗の状態から見て右側にある扉の向こうは由梨亜の居間のような所で、千紗が遊びに行くとその部屋でよく遊ぶ。

その更に奥にある扉の向こうは、勉強部屋のはずだ。

いつも、由梨亜の家に遊びに行くと、沢山の部屋が由梨亜一人の為にあることに、呆れ半分、羨望半分の思いを抱えていたことを、はつきりと思い出す。

（……良かったあ……まだ、由梨亜との記憶を……彩音千紗としての、あたしの記憶を、失ってない……）

その時、鈴南が侍医と由梨亜（ではなく千紗）の父と母を引き連れて戻って来た。

「千紗様、具合が悪い所はありますか？」

そう侍医が問い掛けてきて、千紗はようやく自分の身体がどういう状態なのかを確認した。

大した痛みはないが……何だか、よく分からない。

「えっと、少し眩暈がするよう……グラグラするよう……変な

感じですよ」

千紗が正直に言うと、侍医はあっさりと言った。

「それは、お腹が空かれたからでしょう。ですが、まだ消化のよい物を食して下さい。少しずつ元に戻っていくでしょうから、それまでは我慢して下さい」

侍医は、由梨亜（ではなく千紗）の父と母に言った。

「薬を処方しておきますので朝と夕に飲ませて下さい。あと無理に起こして疲れさせないようにお願い致します。それでは鈴南殿、薬を調査してお渡しますのでこちらへ」

侍医はそう言うのと鈴南と一緒に部屋を出て行った。

「千紗……」

由梨亜（ではなく千紗）の母は、千紗の額にかかっている髪を掻き上げ、優しく、にっこりと微笑んだ。

「千紗、貴女は一日、眠り続けていたのよ。夏休みが明けたその初日に、貴女、一人で、屋上でお弁当を食べていたでしょう？ その時、貴女は倒れてしまったのよ。貴女が倒れたと聞いて、本当にびっくりしたわ。心臓が止まったのかと思ったのよ」

「千紗、お前は起き上がれるようになったが、まだ本調子ではない。無理せず寝ていなさい。なにか欲しい物があれば、言ってくれ。できる限りのことは叶えてやるから」

「いいえ。何もありません」

千紗がそう答えると、由梨亜（ではなく千紗）の父は

「そうか。では、何かあったら鈴南に言え」

と寂しそうに言い、部屋を出て行った。

由梨亜（ではなく千紗）の母は、千紗の枕元に座った。

「千紗、もうしばらく眠っていなさい」

由梨亜（ではなく千紗）の母は、千紗を愛おしそうに撫でて、子守唄を謡い始めた。

千紗は、

（十三歳になったのに子守唄か……）

と少々呆れながらも、その手の感触を楽しんだ。

千紗の（実は養）父と（実は養）母は共働きで、幼い頃の記憶は、ほとんど保育所で遊んでいる記憶だ。

物心がついてから、（実は育ての）両親に甘えた記憶は少なく、親としての優しい手をほとんど知らないのだった。

しかも、千紗の（実は養）父が死んでからは、（実は養）母は家計を支える為に今まで以上忙しくなり、休みもほんの少ししか取れなくなった。

そして、その手触りを楽しんでいるうちに、千紗は、深い眠りへと引き込まれて行ったのだった……。

千紗は三日も経つと、元通り元気になった。

千紗は動き回れるようになると、屋敷中の絵や写真、今まで撮った成長記録などを全て確かめたが、恐ろしいことに、全て由梨亜の代わりに幼い千紗が写っていた。

最初は記憶を探っても何もなかったが、しばらく時間が経つうちに、その光景が浮かび上がり、その頃の、自分の本当の記憶が思い出しにくくなり、千紗は鳥肌が立つのをまざまざと感じた。

「ど、して……」

そう、声が漏れるのを、抑えることができなかった。

（あたしは……由梨亜の記憶を、少しずつ失っていくの？ だんだん？ 少しずつ？ だったら……いつそのこと、最初っから、全部奪えば良かったのにつ……！）

そう思うことを……抑えることが、できなかった。

千紗は目覚めてから一週間後、学校へ行くことになった。

そして学校へ行った千紗が教室のドアを開けると、喜色満面の並なみ樹咲きさきが振り返った。

「あら、千紗様！」

そう言つと、驚異的な速さで千紗の前まで来て、その勢いに、思わず千紗は一步退いた。

「千紗様、お加減は宜しいですか？ あたくし、千紗様が学校に来られるようになって本当に嬉しく思います！」

咲はそう嬉しそうに言つと、嫌そうに後ろを振り返った。

「おお、嫌だ。千紗様、ご覧下さいな。この清潔な学校に黴菌があります。お前達、何をしているの？ すぐに追い出しなさい。千紗様にも、このあたくしにも、この黴菌と同じ空気を吸わせるおつもりっ？ お前達庶民とは違い、大貴族である千紗様はとても繊細なのですよっ？！」

その言葉に、千紗は由梨亜が転校してきたばかりの頃のことを思い出し、嫌な気分になって眉を顰めた。

けれど、咲に一喝されたクラスメイト達は、咲に目を付けられるのが嫌なのか、続々と動き出した。

「おい、香並かなみ、立てよ」

「そうよ。第一、咲様と名前が二字も被ってるなんて、目立ちたがりにもほどがあるわ！」

みんなにいじめられている香並都樹つきは、優しく大人しい気性の少女である。

だが、そこが咲の癪に障ったのか、都樹は咲にとって、千紗以来である二年振りのいじめのターゲットになっていた。

都樹は、みんなに囲まれ、怯えていた。

「おい、何か言えよ」

「えーっ。黙秘権かよ」

「っつーか、香並にそんな権利なんてあんのかあ？」

「って言うか、香並に人権ってあったっけ？」

「ないない、絶対ない！ って言うか、香並って、人間だったっけ

か？」

「ああ、こいつは黴菌だ！」

「ええ、その通りです！　これからみんなもそれを黴菌と呼びなさい！　それは人でもないし、名前もないのですから！　力でもって、このことを思い知らせなさいっ！」

咲の言葉にクラス全員で笑い、都樹の持ち物を全て都樹に向かって投げ付け、殴り蹴る。

その笑いには、咲は気付いていなかったが、恐怖が滲み出ていた。本当はいじめたくないけど、言い返したり、参加したりしなかったら、自分がいじめられるから――

自分だけはいじめられたくないし、人身御供が他にいるなら別にそれで――

そういう思いが、このクラスを覆っていた。

しかも、このいじめは、傍観者という者が存在できない。

もし傍観していたのなら……例えば、みんなでいじめている人物を取り囲んでいる時、もし一人だけ取り囲まなかったら、今度はその人がいじめられる。

もし全員でやらなかったら、咲が教育委員会に泣き付き、全員、退学か停学となるだろう。

先生達も、怖いから言いなりだ。

千紗には、その思いが痛いほど分かる。

千紗も、二年前までいじめられた一人だったから。

その思いを、まざまざと付き付けられた張本人だから。だが、だからと言って無視する訳にはいかない。

千紗は、都樹を庇うつもりだった。

由梨亜が千紗を救ってくれたように、今度は千紗が。

「あんた達っ！　もう、好い加減やめなさいよっ！」

「千紗……様？」

咲は呆然としながら言った。

恐らく、五年生の時に転校して来た『本条由梨亜』と、それまで

いじめられていた『彩音千紗』という存在が消え、五年生で転校して来た『本条千紗』という存在のみになった為、咲が千紗をいじめていた事実はなく、勿論『本条家の令嬢』に咲がいじめを咎められることもなく、いじめが再発したのだろう。

その事実に苛ついた千紗は、途惑う咲を丸っ切り無視する。

「あんた達ねえ、そういう風に嫌々いじめるのがって楽しい？ 本当は嫌なんだけどって思ってるの、ものすっごく分かるよ？ そうやって、咲が喜ぶだけ！ もう、こないじめなんてやめてっ！」

千紗はそう叫ぶと、都樹の所に行き、手を差し伸べた。

「大丈夫？ 都樹」

「すみません……ありがとうございます、千紗様」

「やめてよ、敬語なんて。他のみんなも」

千紗は、周りをグルッと見渡した。

「今後一切、いじめはやめて。もしあたしの目の届かない所で咲がいじめていたら、すぐにあたしに言って。……咲」

そう言くと、千紗は咲に向き直る。

「今後一切、いじめを禁じます。それがあたしの耳に入ったら、どんなことになるのか分かってるわよね？ 本条グループには、そういうようなことをやるだけの力はあるわよ」

千紗が脅しを掛けると、咲は顔を歪め立ち去った。

「千紗様……本当に、ありがとうございます」

都樹が千紗に向かってお礼を言くと、

「そんな大したことをやったつもりはないわ。だから、お礼なんて必要ないわよ」

「ええ。分かりました、千紗様」

「あ、そうだ。あたしのこと敬語で呼ばないでね。絶対に」

「そ、そんな……本条グループのご令嬢を……」

「だから、そういうことを気にしないでね！」

千紗が強引に押し切ると、都樹は顔を僅かに引き攣らせながらも、何とか言った。

「は……う、うん！　ち、千紗、ちゃん！」

千紗は、嬉しそうに微笑んだ。

そしてそれを見た都樹も、ぎこちないながら微笑み返した。

その日、千紗は感覚的にはかなり久し振りに部活へと行った。

「あゝっ！　大丈夫？　もう何ともないの？」

「あ、はい。ご心配をお掛けしました……」

「ううん、そんなのは大丈夫よ。でね、その……夏休みにやった、あの百不思議のことなんだけど……」

「やっぱり、悪戯ですか？」

千紗にズバツと切られ、柑奈^{かな}は絶句した。

「うん……そう。気付いてたの……。何かがっかり。からかいようないじゃない」

「当たり前じゃないですか、柑奈先輩」

千紗と同級生の子が、ガツと近寄って来た。

「ね、千紗。あたし達がやった時に見付けた、この指輪^{ゆびわ}。やっぱり、先輩の悪戯だったんだ。で、千紗が学校休んでちよつと経ってから、先輩達がネタばらして言って、冗談だったってばらしたの」

その言葉に、千紗は笑って言った。

「やっぱりそうかあ……なんか、怪しいって思ってたんだよねえ……。ね、あたし達が見付けたのって、ほんとにその『指輪』だった？」

「うん。そうだよ？　何言ってるの？　千紗」

その言葉に、千紗の顔は笑っていたが、背筋に冷や汗が流れるのを抑えることはできなかった。

第五章「時と宇宙（そら）を越えて……」――3

「御久し振りに御目に掛かります、陛下。この度、わたくしを花鶯^{かおう}国^{こく}へ連れ戻して下さいましたこと、本にありがたく存じます」

「富実樹^{ふみき}第一王女よ、大きくなられ、再びこの国に御戻りになられたこと、喜び申し上げます。これからは、この国の王女として、また跡継ぎの娘として、そして弟妹達の姉として振舞うよう、御願致します」

そう言ったのは、一段高い所にある玉座の足元に控えている、一見ただけでかなりの大貴族だということが分かる男性である。

そして、その玉座に座った威風堂々とした男性の足元に、略式ではあるが一国の国王に、そして自らの父に、公式な場で挨拶するのに相応しい礼をした、美しい少女がいた。

ここは花鶯国の王宮、カサミアン宮の玉座の間。

男性の足元にいるのは、生後一ヶ月足らずでこの国を離れ、そして十三歳になった今戻って来た、花鶯国第一王女にして第一王位継承者である、花雲^{かつぎよう}恭富実樹。

そして、玉座に座っている男性は言うまでもなく、ここ花鶯国の国王にして富実樹達十五人兄弟の父である、花雲恭^{ほふ}峯慶^{ほうけい}。

そして、左右の長机に座っているのは、普段から王族との接触が許されている大臣級の貴族や官吏十数人と、庶民からの選挙で議会の委員になつたうちの代表五名。

そしてその短い対談が終わり、富実樹と峯慶は、一緒に後宮の峯慶の部屋の一つに行った。

部屋に着いてから、峯慶は富実樹に向かって尋ねた。

「富実樹……本当に、良かったのか？ 戻ってきて。来年でも良かったのだよ？ いくら向こうにいても、こちらに戻って来るその時は、変わらなかったのだから……」

「……そのことは、仰らないで下さい。私も、後悔していますから

……」

「では、何故そうしなかったのかな？ 私の娘よ」

峯慶が茶目つ気を出してそう尋ねると、富実樹は少し唇を尖らせて答えた。

「あれ以上、千紗ちさが——私と入れ替わった人が、真実から押し出されていくのに耐えられなかったんです。それに、知らせてしまったとしたら、私も千紗も、どこかきこなくなってしまうです。それだったら、告げたらすぐに戻る方が良かったんです」

「そうか……それでは、お前はこれからこの国の地理歴史、王族としての立ち居振る舞い、言葉遣いその他諸々を学びなさい。丁度よい教師もいることだしな」

「御父様、丁度よい教師とは、どなたですか？」

「今呼んで来るから焦らないように。由梨ゆり亜妾あしやう、富瑠美ふるみを呼んで来なさい」

由梨亜妾——富実樹の母は、その『富瑠美』を呼びに行った。

しばらくして、ノックの音がして、由梨亜妾と、その『富瑠美』だと思われる、富実樹と同じくらいの少女が入って来た。

「失礼致しますわ。御父様」

（御父様……？）

富実樹は嫌な予感に駆られたが、見事にその予感的中した。

「富実樹、これは深沙祇妃みさぎひの娘で第二王女、第二王位継承者である富瑠美だ。つまりは、お前のすぐ下の異母妹いもつとだよ」

そう紹介された富実樹の異母妹の富瑠美の髪は、富実樹と似てふわふわと波打っていたが、金系に勝るとも劣らない見事な金髪で、目は富実樹と同じ桃色だが、色は富実樹よりも濃い色で、背は富実樹より少し小さい。

そして、髪の色、瞳の色、それに身長を見ないことにすれば、瓜二つであった。

「御異母姉様おねえさま、御初に御目に叶いまして、わたくし、本当に嬉しゅう御座いますわ」

「貴女は……私の異母妹の……富瑠美様？」

富実樹はどこか呆然としながら問い掛けた。

だが――

「それはいけませんわ。御異母姉様」

いきなり、富瑠美がきつぱりと言い返して来た。

「まず、一人称は『私』ではなく『わたくし』と仰つて下さい。それにいくら母親が妃と妾ではあつても、第一王位継承者、及び第一王女は貴女様で御座います。つまり、わたくしの異母姉に当たります。ですので、わたくしのことは富瑠美と御呼び下さいませ。それから、絶対に他の兄弟に様付けをしないで下さい。実の兄弟で、それも貴女様の方が格上であらせられるというのに、それは大変可笑しいことですわ。誰に何度訊こうとも、誰もがそう返すはずに御座います」

いきなりどぎつぱりと言われ、思わず目を白黒させていると、苦笑しながら峯慶が言った。

「富実樹、富瑠美はお前の異母妹ではあるが、お前を裏切る可能性の少なく、そして最も地理歴史儀礼祭典等に通じている。これからお前は富瑠美に付いて、様々なことを学びなさい」

「は、はい……分かりましたわ。御父様」

それから、

（どうして……富瑠美は、あの深沙祇妃の娘なのに……）

と不思議に思い富瑠美を見ていると、富瑠美は苦笑して答えた。

「御異母姉様、このことを不思議に思うのも、無理は御座いませんわ。わたくしは、御異母姉様とはほんの二時間差で産まれ落ちましたが、そのたったの二時間で、わたくしは第一王位継承者にはなれませんでした。それに、わたくしの御母様――深沙祇妃は失望して御母様付きの侍女侍従共々、生後間もないわたくしを育児放棄してしまつたのです。早い話が……そうですね、ボイコットですわ」

「ボイ、コット……？」

富実樹の問いに、富瑠美はあつさりと答えた。

「ええ。第二王位継承者とは言え、王位継承権を持つ子供が死んでしまつては堪りませんから、御父様が、わたくしを御母様から無理矢理取り上げて、由梨亜妾に預けたのですわ。そして名付けもして頂きました。ですから――」

「ちょ、ちよつと待つて。貴女の御母様……深沙祇妃は、名前も付けずにボイコットした訳？ それって大事じゃない！ 誰も、何も言わなかったの？」

咄嗟のことで、富実樹は思わず敬語を使うのを忘れてしまった。

だが、その途端……富瑠美の冷たい視線が、富実樹を射抜いた。「それでは、後で言葉遣いの猛特訓をさせて頂くといいことで……」その地を這うような低い言葉に、富実樹は思わず一歩後退つてしまった。

「まあ、そうですね。それどころか、御母様の後見人は、皆それに便乗してしまいましたわ。しなかつた方も、いるにはいましたけれど……。ですが、他の方々は、わたくしが第二王位継承者であること、そして阿実^{あみ}亜女^{あじよ}に懷妊の兆しがあることから、御父様と由梨亜妾以外からは、本当に無視されましたわ」

「へ、へえ……」

思わず、富実樹は感心してしまった。

「そうですね。こんなことを話している場合では御座いませんでした。それでは、早速授業の方を始めたいと思います。御異母姉様、授業のことですが、この国のことについてどのようなことを御存知ですか？」

「はい。えつと、この国が宇宙連盟の長的役割を持っていることや、地球連邦が他の星の存在を知らなかった時の日本国との関係など、基本的なことしか……」

「そうですね。では、地理歴史から始めましょう。また、それらの合間を縫って言葉遣いと儀礼作法を。それでは地理から始めましょう。こちらへ。あと、昼餐は御食事のマナーの練習です。やることは沢山ありますわ。それと、ことによつては他の弟妹達の力も借り

ますわよ」

「は、はい……」

さっさと歩き始めた富瑠美の後を慌てて追って行ったが、富瑠美が滑るように歩いているのに対し、富実樹はそれと逆だった。

そして部屋に残っていた富実樹の父母は、富実樹の

「どうしたらそういう風に歩けるの……？」

と言う弱音を聞き、笑い出してしまった。

峯慶はゆったりと重々しく、由梨亜妾は軽やかに。

「まあ、なんて面白いこと……」

由梨亜妾が言つと、峯慶も言つた。

「ああ。こう言う子供達に育つとは、正直言つて、あの時は思つてもみなかった……」

「そうですね。本当に、予想も付かないことばかりで、面白う御座います。……そう言えば、陛下。富瑠美があゝの誓約書を書くこと、深沙祇妃は御承知なさいましたの？」

「ああ、それか。勿論、気が狂ったかのように騒ぎ出したよ。だが喚いている隙に富瑠美がさっさと署名して、それでことなきを得た。さすがは、富瑠美だ。其方が育てたことはあるな」

「……ええ。まあ、そのことは置いておくとして……それは、深沙祇妃は騒ぐでしようね。富実樹に何も無い限り、王座を狙わないという誓約書だなんて……」

「ああ……。そうだな」

峯慶は小さく笑みを洩らして言つたが、ふと、真顔になつて由梨亜妾に問い掛けた。

「話は変わるが、あの二人は、本当に自分の名前の意味を解つてくれるだろうか。我々が、心を込めて付けた名を……」

峯慶のその溜息のような言葉に、由梨亜妾が風のように呟いた。

「富実樹は、『富や名声を陰謀などによって手に入れるのではなく、優しい行いによって心を富ませること、樹木を視てその神秘を感じる美しい心、そして、その時に実った果実を、単なる食糧としてみ

なし、感謝する気持ちすら持たないのではなく、ここまで育ってきたその生命力と大地の恵みに感謝する心』を、富瑠美は『心を富ませ、豊かな心を持つように、高貴さを表すラピスラズリ——瑠璃のように気高い心を持ち、それでいて弱者を思いやる気持ちを持ち、宝石のように美しく、きらきらと光る美しさ、心を持つように』と、わたくしが付けた名のことですね？」

「ああ。……富実樹は解ってくれるかも知れないが、富瑠美は、真実解るとは思えないな。あの深沙祇妃の血を引いているのだから、やはり似る所はある。富瑠美は、物事を深く追求せずに、上辺だけを飲み込んで行動することが多々あるから……。富瑠美には、この意味が、解らないだろう。……さて、そろそろ行かなければ。処理しなければならぬ書類が山ほど残っている」

「いつてらっしゃいませ、陛下。ですが、わたくしの記憶違いでなければ貴方様は、書類の処理は、他の御兄弟と比べて、凄まじい速さでこなされていたと思いますが……」

由梨亜妾は、茶目っ気たっぷりに含み笑いをし、峯慶も同じように笑い返してきた。

どうやら、この夫婦は茶目っ気がたっぷりとある、似た者夫婦のようだ。

「それは、他の兄弟が少し遅くて、私が少し速かったということだけだよ」

そう言つと峯慶は部屋を出て執務室へと向かい、由梨亜妾は自分の部屋へと向かった。

第五章「時と宇宙（そら）を越えて……」― 3（後書き）

今回の話で、第？部はようやく中盤まで進みました。ここまで読んで下さって、ありがとうございます。

次話からは、少し時間が飛んで四年後になります。それぞれ、本来の居場所に戻った二人、特に富実樹（由梨亜）の方が、どんな活躍を見せて、どんな選択をするかに焦点が当たることになります。富瑠美以外の富実樹の兄弟達も登場する予定ですので、お楽しみ頂けたらと思います。

この話はまだまだ続きますので、どうぞ宜しくお願いします。

第六章「四年後……」― 1

それから、四年近くの月日が流れた。

現代に戻って来ておよそ二年半後、千紗^{ちさ}は高校も公立校へと、両親の反対を無理矢理押し切って入学した。

そこは、大学への――特に有名大学への進学率がとても高い学校で、しかも偏差値も平均が七十近くあるというとても頭のよい学校であり、いくらお嬢様でも簡単には入学できない、実力で申し上がつて来た学校なのだ。

なので、耀太^{ようた}も

「公立校……進学校……うゝん……」
と唸るしかなかった。

進学校と言うことは跡取り娘が優秀であるということを証明できるが、私立ではなく公立、しかも男女共学という所が躊躇^{ちゅうちよ}わせるのだった。

だが、結局は千紗が勝利したのである。

しかし、三人の婚約者候補の問題があった。

千紗はこの婚約者候補達と会いたくないから、高校も部活に入ろうと決めていた。

そしてどうせなら一番忙しい部活に入ろうと思い、体験入部した文化部（運動部だけは何かあっても絶対に駄目だと言われたので）の中で、レベルが高く忙しそうだった吹奏楽部に入部し、ホルンを担当した。

そして、意外と千紗には才能があったらしく、中学から続けている人には及ばずとも、そうでない一年生の中では一番上手くなった。三年生が引退した頃には、中学校から続けている人と並ぶぐらいまで上手くなった。

そして二年生になり、全地球コンクールのユーラシア大陸大会で好成績を修め、しかしながら連邦大会には出場できずに先輩達は引

退して行った。

先輩が引退した後、千紗が部長となり部活を引き継いだ。それでも耀太と瑠璃は婚約者候補を諦めず、しつこく誰が一番いいかを訊いて来た。

千紗は本条家の令嬢として相応しい身のこなし方を身に付けていたが、それと同時に由梨亜のことを少しずつ忘れていき、一年経った頃には完全に忘れた。

たまに釈然としないことや、寂しく感じる事があったが、小さなことだった為、そのことすら忘れてしまった。

富実樹は、一年間富瑠美達富実樹に好意的な弟妹達から時に厳しく、優しく、厳しく、厳しく、厳しく色々なことを教えてもらい、他の弟妹達に追いつくぐらいまでになった。

そして、富実樹が戻って来て一年後の年、峯慶は身体の調子を崩してしまった。

長い間ベッドから降りられない身体になってしまったのだ。

なので、峯慶は譲位して病気の治療に専念することになり、多数の反対があったものの、第一王位継承権を持っている、この国に来てまだ一年と少しの富実樹が女王として王位に即くことになった。

富実樹はただ純粹に父を心配し、王位に即いたからには、他の弟妹達と力を合わせて国を護って行こうと考えていた。

そして、富実樹が王位を継いで二年間が過ぎ、三年目が始まって半年が経った頃、この花鶯国では何かが起ころうとしていた。

そこでは、官封貴族と呼ばれている、官位を封じられている貴族、官吏、成人した王族が大会議室で討論会を開いていた。

「陛下、地球連邦は陛下が御育ちになられた地でおられることは存じておりますが、そのような些事に心を傾けるのではなく、寛大な御心を御持ちになられて下さいませ」

「だから、そういう意味ではありません。貴方方は地球連邦を、武力を持って従わせ宇宙連盟に加盟させ、宇宙連盟の長である花鳥国の言うことを聞かせようと仰いますが、わたくしはその方法が間違いだと言っているのです。武力ではなく話し合いを持って連盟に加盟させないといけません。武力を使ったら、必ず死者が出ます。それは、誰かの親であり、兄弟であり、子供であるのです。誰かが死んだら、誰かが悲しみます。そして、悲しみは恨みを呼び、そして復讐へと発展する可能性が高くなります。そして、復讐はまた新たな悲しみと恨み、復讐を呼び、グルグルと回り続けます」

富実樹は、唇を引き結んでぐるりと辺りを見渡した。

「ですが、その原因となることを起こさなければそのようなことは起こらず、復讐自体なくなります。そして、そのようなことがあるのなら、どこかで断ち切らなくては国と国との関係が成り立ちませんわ。そして、一度亀裂が入ってしまった関係は戻りがたい物です。だから、そのようなことを、他の方法があるにも拘らず行使することはなりませんわ。絶対に。それに、宇宙連盟の存在意義は、全宇宙の平和と共存を維持すること。武力などを使ってしまうえば、その理念に真っ向から相反することになりますわ。何か反論は御座いますの？」

富実樹の呼び掛けに、富瑠美派の貴族は黙り込んだ。

反論しようにも、富実樹のあまりにも上手い弁舌に、上手く反論する術が見つからないのだ。

だがそんな状況の中で、富瑠美は何と富実樹の言葉遣いを注意した。

「陛下、『だから』ではなく『ですから』と御言いになられなければなりませんわ。また、『ずっとグルグル回り続けます』も、できれば『半永久的に悲しみ、恨み、復讐と連鎖するのです』に直した方が宜しいかと。一年間の特訓が足りなかったのかしら……？」

「いいえ、充分足りておりますわ！ただ、熱心になるとつい……」
「なるほど。では、熱心になって言葉遣いをきちんとするよう常に

御心掛け下さいませ。それではもう意見は出ないようなので、本日はこれでお開きということに宜しいですか？」

富瑠美が立ち上がってそう言くと、皆が頷いた。

「それでは、明日の総票会そうひょうかいで、この議題の結果を」

総票会とは、一定年齢に達した王族、官封貴族、地封貴族ちほう、官吏、宗教家、学者が投票する物である。

富実樹がそう言い、討論会は終了となった。

富実樹は早々と書類を自分の親族の貴族に預け、大会議室を立ち去って行った。

富実樹は自らの部屋へと戻り、長椅子の上に、バフィンと倒れ込んだ。

「もう、嫌になってきちゃうよ……」

「何が嫌になるのですか？ 富実樹御姉様。それと、言葉遣いを直して頂かなければ」

「分かっておりますわ。ただの独り言です。それよりも些南美さなみ。どうかなさいましたの？」

富実樹を、十四歳の富実樹の妹で第五王女、峯慶の第九子である些南美が覗き込んだ。

些南美はくすくすと笑うと、富実樹に言った。

「富実樹御姉様、そのように寝転がるのはとても御行儀の悪いことで御座いますわよ。即刻やめて頂かなければ富瑠美御異母姉様おねえさまの御所に参りますが、どう致しますか？」

「はいっ。起きますわっ！」

富実樹は跳ね起き、長椅子に座り直した。

「それで富実樹御姉様、今日で、あのことについては最後の御前会議でしたが、何か御座いましたの？」

「ええ。わたくしは地球連邦を宇宙連盟に加盟させるのは大賛成で

す。地球連邦の方々にはわたくし達よりも器用ですし、科学の発展にも繋がると思いますのよ。ですが、武力でそんなことをしてしまつたら、地球連邦から好意的な協力は得られにくいと思うのです。わたくしも、同じ立場でしたらそう考えると思います。ですから、できれば最初から武力を使うのではなく、まずは話し合いで加盟させた方がよいと何度も言っているのですが、富瑠美派の貴族達の反対が激しくて。総票会でどうなるかは、最後の御前会議で大体分かると御父様は以前仰っておりますが、わたくしには全く分かりませんでしたわ。それは、他の方も同じようです」

「そうなのですか。ですが、いつの世にも、国民全員から支持される完全無欠の王なんておりませんわ。もし反対意見が出たら可笑しいという物以外で反対意見が絶対に出ないのなら、そこは王の言うことが絶対で、王に反対することは諸悪の根源だと決め付ける国だけです。真に喜ばしいことながら、この国はそうでは御座いませんもの。反対に合うのは仕方のないことですわ」

些南美は少し苦笑気味に言った。

「それよりもわたくしは、富瑠美御異母姉様がおうだいじん 鶯大臣に御着任なされたことに、とても驚きましたわ」

ちなみに、鶯大臣とは花鶯国の大臣の一種で、その大臣には代々王の弟妹になる。

そして、王が退位すれば鶯大臣も政から身を引き、鶯大臣が位を退けば王も退位するという慣習がある。

つまり、花鶯国の国王と鶯大臣は、いわゆる一蓮托生の間柄なのだ。

一年も前の話を言われ、今度は富実樹が苦笑気味に言った。

「ええ。大抵の方はそう思われるでしょうね。富瑠美は、あまり物事を深く考えずに表面を見て判断することは多いのですけれど、政治力と様々な方面に通ずる知識は、賞賛に値しますわ。まだこの国に来て四年のわたくしとは、まるで比べ物になりませんもの」

「それは、わたくしも認めますけれど……」

些南美は少し唇を尖らせて言いました。

「わたくし、やはり富瑠美御異母姉様を鶯大臣に据えたのは、間違いだと思いますわ。幼い頃はわたくしと一緒に育ち、御母様のことを慕っていらつしゃるとはいえ、何しろあの深沙祇妃みさぎひの娘ですから他にも、富瑠美御異母姉様に準ずる方はいらつしゃるでしょう」

富実樹は小さな溜息をつくと苦笑し、何も知らない子供に教えるように言った。

「いいかしら？ 些南美。物事は……特に政治は、こちらの信じる物だけを推し進めては成り立ちませんわ。これは、わたくしと富瑠美のことでも言えることです。わたくしが十三でこの国に戻ったことで、自らが後見する深沙祇妃の子である、富瑠美が王位に即けなくなってしまうたのですもの。深沙祇妃の後見人達は、皆大損をしたと思われますわ」

富実樹はそう言つと、苦笑した。

「沙樹奈后さきなこうは、息子がわたくしの夫となることに決まりましたし、何よりもこの国で生まれ育った王族で御座いますし、御母様とも仲が宜しい方でいらつしゃいますから、このことは深く理解しておいでです。ですが、深沙祇妃はそう簡単にはいきませんわ。元々は他国の王族でいらつしゃいますし、ことは外交問題にまでも発展する惧れが御座います。そして、その不満を解消するには、深沙祇妃の子供のいずれかにそれなりの役職を与えるのが一番ですわ。丁度、富瑠美は政治面でも知識面でも才能に溢れておりますから、鶯大臣に就けただけのことです。それに、富瑠美がいなくても、他の誰かが富瑠美と同じことを言い出すでしょう。つまり、結果としてあまり変わりはありませんわ」

「ですが、富実樹御姉様……」

些南美が反論しようとした時、扉が叩かれた。

「失礼致します、富実樹御異母姉上あねうえ」

そう言つて、たった今話題にしていた沙樹奈后の長男で、第一王子であり峯慶の第三子、そして富実樹の婚約者である杜歩埜とふやが入っ

て来た。

「あら、杜歩埜。どうなされましたの？」

「またもや富瑠美異母姉上達を論破なされたと小耳に挟み、やって来たのですが……」

そう言つて苦笑すると、

「どうやら、先客がいたようですね。さすが些南美、情報が速い」

「そんなことは御座いませんわ。わたくしは結果しか存じ上げませんでしたもの」

そう言つて、二人は互いの目を見つめ合い、くすくすと笑つた。

富実樹はそれを苦笑して見ていたが、長椅子から立ち上がると、
「どうやら、わたくしは御邪魔なようですわね。それでは失礼致しますわ。久しぶりに、御母様に会つて参ります。どうぞ、わたくしの部屋での逢引きを御楽しみ下さいませ」

と言い、本当に部屋を出て行つてしまった。

見る人が見れば、杜歩埜と些南美は相思相愛だということがはっきりしている。

だが、現実的に見て、二人が結婚できる確立はとても低い。

この国の王家は、近親婚で成り立っている部分がある。

男王の場合、二人が嫌がらなければ——まあ、滅多に嫌がることはないのだが——后は一番高い王位継承権を持つ妹がなり、女王の場合は一番高い王位継承権を持つ弟と結婚する。

男王の場合、確実に妹の子供が王籍に残るとは限らないが、女王の場合は血が色濃く保たれる。

しかし、それは王位に即くことができれば、の話。

それを叶える為には、富実樹と富瑠美がどうにかなつて王位を継ぐことができなくなり、更に阿実亜女あみあじよの長女で第三王女、峯慶の第四子の璃枝菜りえなと、沙樹奈后さくなごの長女で第四王女、峯慶の第七子の早理恵さりえがどうにかならなければならない。

そして、それはとても可能性が低い。

また、他の臣下達はそのことに気が付いていない。

二人は、互いに視線だけで満足するしかないのだった。

だが、杜歩埜が富実樹と結婚すれば、正式に認められなくても可能性はある。

それは、『総下』^{そうげ}と言う制度だ。

この国では、男王の場合、后、妃、^ひ妾の^{めかけ}子供が三人、最貴、^{さいき}最侍、^{さいじ}最女の子供が二人産まれれば、もうその妻達は妻としての役目は終わる。

総下とは、昔それに不満を持った王がいて、それを解消させる為に作られた制度だ。

だが、今はそのような意味合いとは違う。

今は、まず貴賤を問わず総下になることを嫌がらなかった二十一歳の娘達が年に一度集められ、王に目通りを許される。

そして、それは一生に一度の大チャンスだ。

王に目通りし、その娘達の中から王の気に入った娘を年に二人から五人ほど選ぶ。

そして、選ばれた娘達は二十四歳の誕生日を迎えるまで王の総下として過ごすのだ。

二十四歳の誕生日を迎えた後は、大半はどこかの貴族の二番目や三番目の妻になる。

つまり、女性としての箔が付き、玉の輿に乗れるということになる。

そして、王位に即いたのが女王だとしても、その夫が総下達の相手をする。

それを利用すれば、富実樹が杜歩埜と結婚した後に、些南美は総下になれるのだ。

また、王や女王の夫が気に入った総下がいたら、もしくはその子を産んだら、その総下は一生後宮にいてもよいことになる。

それまでのおよそ九年間、富実樹は些南美達の恋愛を見守るつもりだった。

たとえ自らの子供が王位に即けなくても、総下の子供は後宮の侍

女や侍従となる慣例だから、血縁者の為に働かされるとしても、それでも愛する人の隣にいられるのなら満足だろうから。

自分なら、そうだ。

今でも、夢の中で目覚めたら香麻こうまが目の前にいた、と言う夢を度々見ている。

あの日、最後に逢った香麻は、少し照れ臭そうに笑っていた——その笑顔が、夢の中で蘇る。

そして、いつもその時の自分は、中学生の由梨亜なのだ。

諦めてはいる——だが、心の何処かで諦められない自分がいる……。

そのことで、富実樹の胸は張り裂けそうに痛んだ。

そのようなことを考えながら歩いていたら、いつの間にか母親の部屋の前まで来ていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7986x/>

時と宇宙（そら）を超えて～分割版～

2011年11月4日08時16分発行